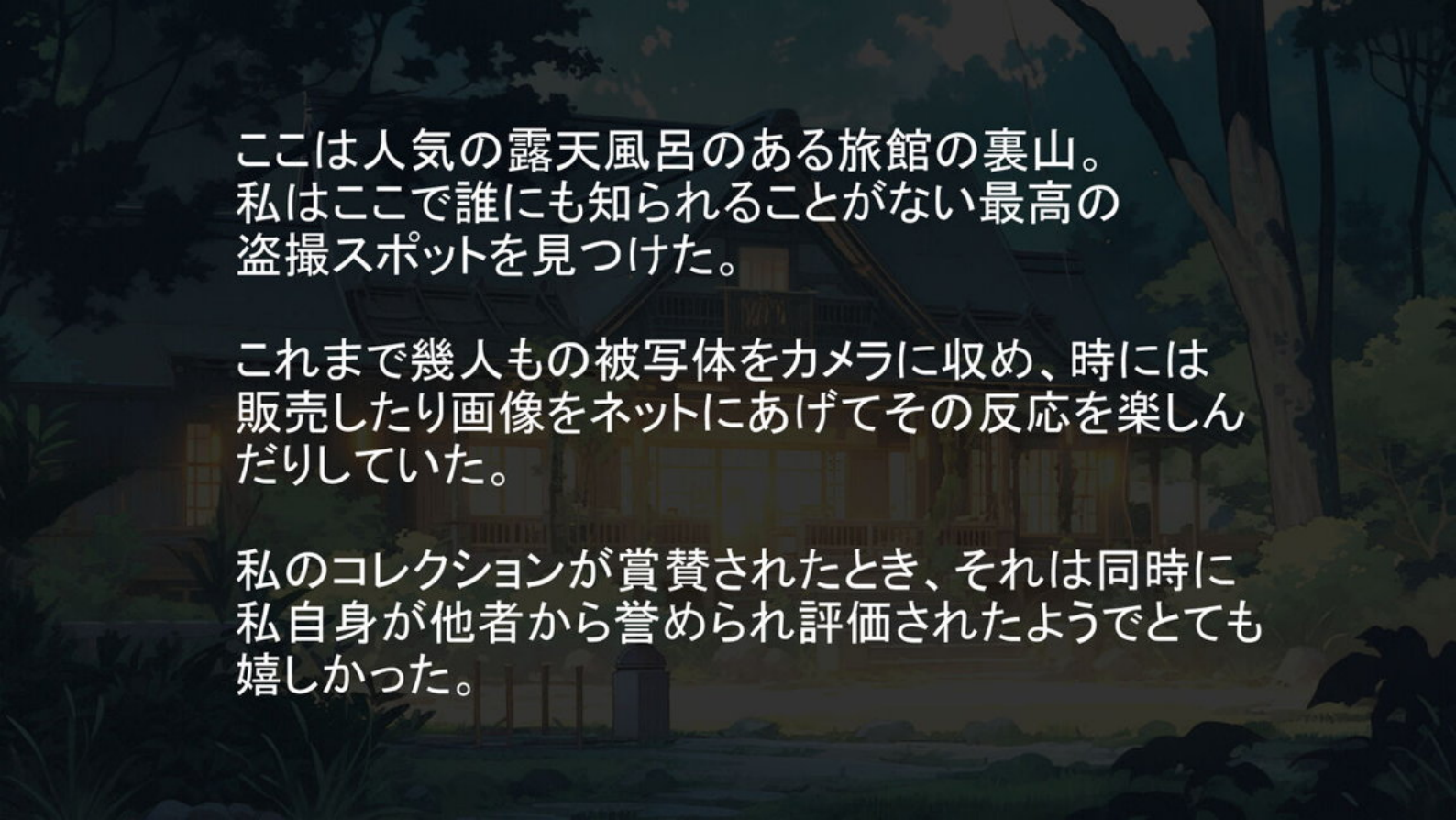




見られながらの
強制中出しに感じる
スイレシママ

R18
ADULT ONLY
成人向け作品につき
18歳未満閲覧禁止





ここは人気の露天風呂のある旅館の裏山。
私はここで誰にも知られることがない最高の
盗撮スポットを見つけた。

これまで幾人もの被写体をカメラに収め、時には
販売したり画像をネットにあげてその反応を楽しん
だりしていた。

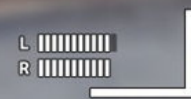
私のコレクションが賞賛されたとき、それは同時に
私自身が他者から誉められ評価されたようでとても
嬉しかった。

REC

--:--:--:--



AUTO



REC

--:--:--:--



それもあってこの盗撮趣味はやめる事が出来なかった。

『より素晴らしい被写体に出会いたい！』

それはトレジャーハンターが宝を求めるような、そんな胸躍る行為だった。

AUTO



REC



---:---:---:---



AUTO



REC

--:--:--:--

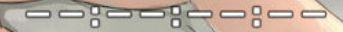
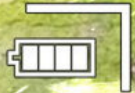


そんなある日、信じられないような美貌の女性が現れた。

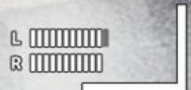
AUTO



REC



AUTO



REC

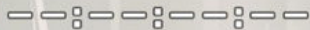


あまりに慌てたためにレンズ越しのピントが
合わないほどだった。

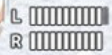
AUTO



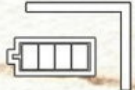
REC



AUTO



REC



AUTO



REC

これまで数年間このスポットから幾人もの女体を
観察してきたがこれほどの肉体におめにか
かった事はなかった。

AUTO

+



-



REC



AUTO



REC



スイレンママ
「あっ…」

湯船にタオルを落としてしまうスイレンママ。

AUTO



REC



AUTO



REC



おじさん

「おお！ なんとっ！」

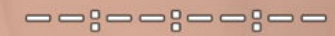
地味目の美人でありながらなんという大きさだ…

美しい…。しゃ…しゃぶりつくしたい！」

AUTO



REC



AUTO



REC

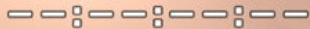
おじさん

「ほっほおおお…オマ…おまんこも丸見えじゃないか！
しかも…パイパン！ 天然なのかなあ。それとも剃って
いるのかなあ…」

ギャル系の子のなんかだとパイパンの子も見かけた事が
あったけど、こんな大人しい美人のパイパンはめったに
いないから彼氏に剃らされてるのかなあ。
なんていやらしんだ！」

AUTO

REC



AUTO



REC



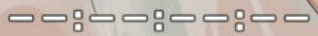
おじさん

「あんなドスケベボディなのに少女のようなツルツルのおまんこをしてるなんてよほど人に見られたい性癖があるに違いない！」

AUTO



REC



AUTO



REC

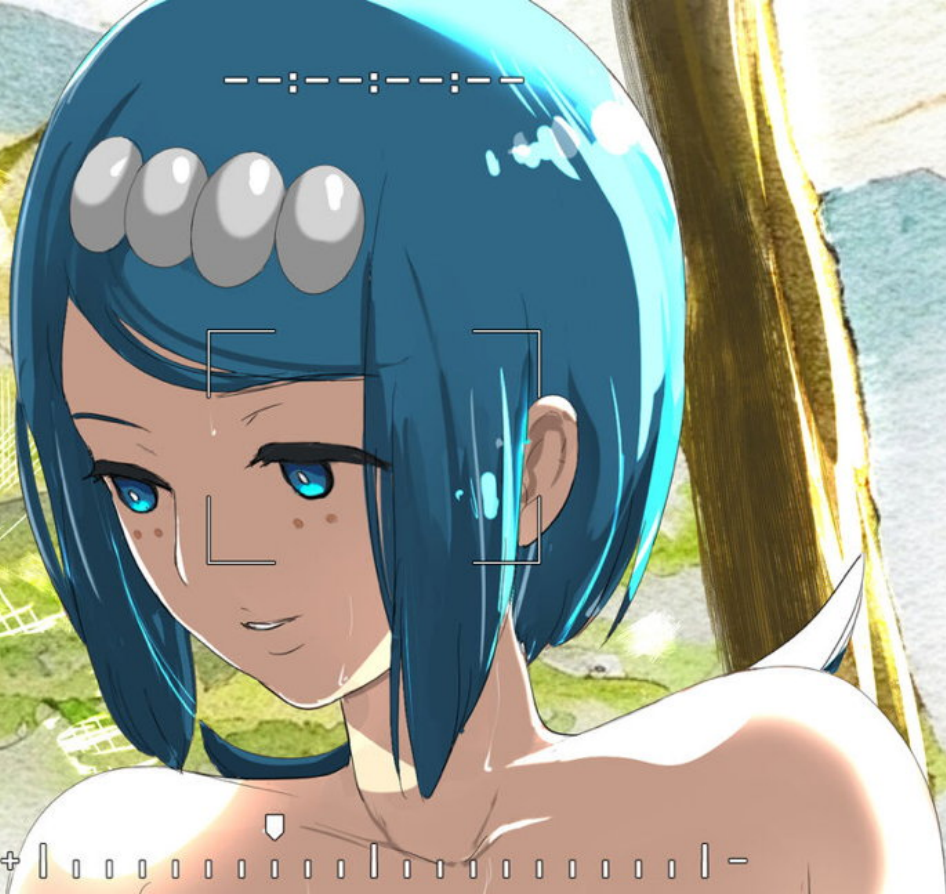
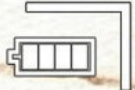
おじさん

「ああ、タオルで隠しちゃった。

…でも、いまさらタオルで隠した所でもうばっち
カメラには収めちゃいましたよ～。むしろ濡れたタオルが
身体に張り付いてよりエロさが増したんじゃないなあ」

AUTO

REC



AUTO



REC

おじさん

「はあ、なんて可愛いんだ。あんな人が恋人だったらどんなに
幸せだろう。動画もたっぷり収めたし、これはみんなに最高の
自慢ができるコレクションになりましたよお」

AUTO



カメラマンさん
XXX-XXX-XXXX



おじさん

「いや、…これは私一人だとみて楽しむだけになる
けれどみんなの意見をもしかしてもしかするかも！
さっそく相談してみよう！」

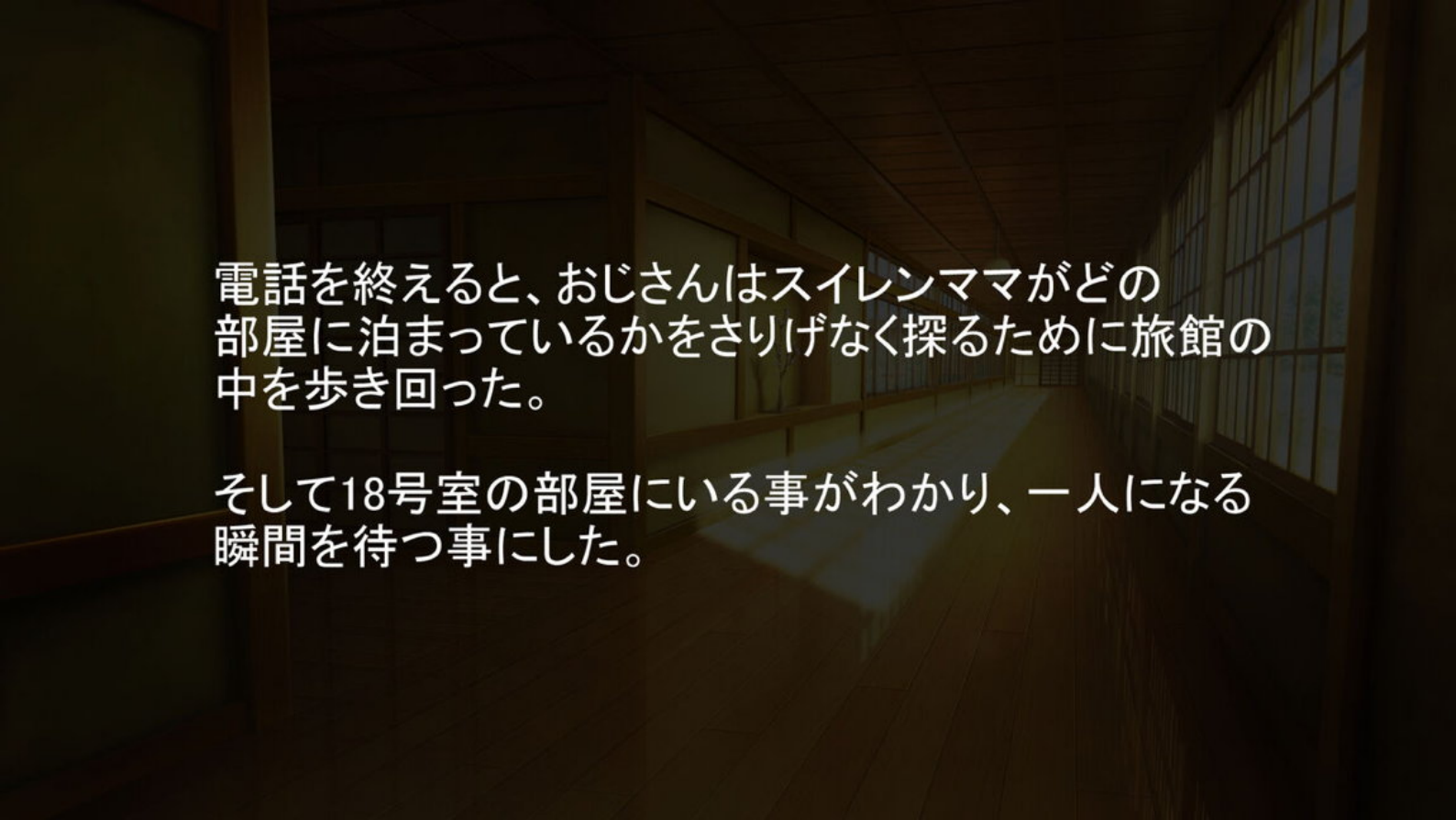
トウルルルル、トウルルルル、ピッ

おじさん

「あっ、もしもし。カメラマンさんですか？
実はですね……………」







電話を終えると、おじさんはスイレンママがどの部屋に泊まっているかをさりげなく探るために旅館の中を歩き回った。

そして18号室の部屋にいる事がわかり、一人になる瞬間を待つ事にした。



やがて家族と思われる集団と一緒に玄関から出ていく所を見かけた。体格のいい男性と面影のある3人の子供たちの後を歩いている。

恋人位いるだろうと思っていたが、まさか3人の子持ちの人妻だとは思ってもみなかった。

おじさん

「あの美女がまさか人妻だったとは。あの独特の色気の正体はそれかあ。む、むしろ人妻だったなんて、より興奮するう」



A woman with short, wavy blue hair and blue eyes stands in front of a traditional Japanese building with a tiled roof. She is wearing a white, long-sleeved, button-down dress. Her hair is styled with three white circular ornaments on top. The background is slightly blurred, showing the architectural details of the building.

おじさん

「こんにちは奥さん。ちょっとお話してもいいですか？」

スイレンママ

「はいこんにちは。…なにか御用でしょうか？」

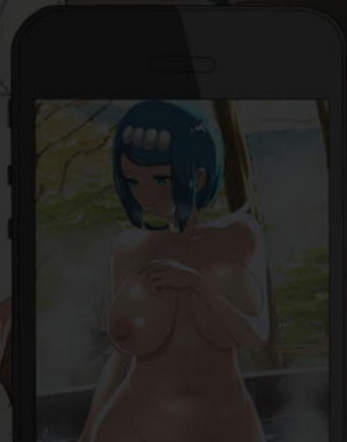


おじさん

「実はあなたに見て頂きたいものがありまして
…これなんですがね」

スイレンママ

「！！ こ、これは！？」





HDR



1/5 f5.6 1/1000 ISO 1000 写真





おじさん

「どうですか？ 良く撮れてるでしょう？
ここなんかこんなにくっきりと。ねえ？」

スイレンママ

「私にこんなものをみせて…何が目的ですか」

おじさん

「よく撮れているでしょう。こんな素晴らしい裸体、
旦那さん一人のものしておくなんてもったいない」



スイレンママ
「こ、こんな事犯罪です！」

おじさん
「そんな言い方されると僕は傷つくなあ。
もういっそ世界中のスケベ共に配信しちゃおうかな～。
…うん、もう配信しちゃおう！」

スイレンママ
「や、や、や、やめてください！」





おじさん

「ええ～…でも犯罪者扱いされたしなあ」

スイレンママ

「先ほどの暴言は謝罪します。だからどうかそれだけは
…いくら…でしょうか？」

おじさん

「はい？」

スイレンママ

「いくらお支払いすればそのデータを消してもらえますか？」



おじさん

「いやいや、いやいやいや。

奥さん、僕を見くびらないでください。

お金なんかが目的ではないんですよ」

スイレンママ

「じゃあ何が目的なんでしょうか」





おじさん

「あなたです。あなたなんです奥さん。
あなたは非常に魅力的だ。あなたと恋人デートがしたい。
心から愛し合う恋人です。」

スイレンママ

「どういう事ですか？あなたと恋人デートがしたい？
心から愛し合う恋人ですって？」

おじさん

「だから～、心から愛し合う恋人ですよ。
愛する人のためなら何でもしたいと思いませんか？」



おじさん

「恋人の望むことはなんでも叶えてあげたいそう思いませんか？ それが『愛する』ってことじゃあ、ありませんか？」

「僕の事をどこまでも満足させてくれたら録画したデータは全てお渡しします。本当です。だから『恋人デート』してくれますよね？」

スイレンママ

「…わかりました。あなたと『恋人デート』すればいいんですね」





おじさん

「むふ～、うれしいなあ！ 奥さんが僕の恋人になってくれるんですね。ああ、じゃあ早速恋人らしい事したいなあ。…舐めたいなあ」

スイレンママ

「え？ な、なにをですか？」

おじさん

「だから～、恋人どうしなんだから舐めるでしょ？ わ・き」



スイレンママ

「な、舐めませんよ、脇なんか」

おじさん

「はあ～、普通なめるでしょ？ 恋人同士なら舐めるでしょ？
あ～あ、じゃあもう投稿しちゃおうかなあ？」

スイレンママ

「わかりました。脇…だします」

おじさんは人気のない宿の空き部屋に
スイレンママを連れ込んだ。





両腕を上げるように言われたスイレンママ。
おじさんは服をめくると脇の下を舐め始めた。

おじさん

「レロレロ、レロレロレロレロ…

美味い！ まあ味はしないんですが柔らかな舌触りと
かすかな温泉と接見の香りがたまりませんね～美味しい！」

「レロレロ、レロレロレロレロ…」

おじさん

「あれ？ 奥さんもしかして乳首立ってませんか？

感じてます？」



スイレンママ

「そんな…事ありません、くすぐったいだけです。
はやく終わってください」

おじさん

[そうですね。じゃあコレをアナルに挿入してくれる
ならやめてあげますよ]

スイレンママ

「なん…ですかそれ？」



おじさん

「アナルを拡張するためのプラグですよ。

ほら、入れてあげますよ」

スイレンママ

「いやっ、そんなもの！」

おじさん

「入れてくれないんですか？ そうですか？

じゃあ奥さんの恥ずかしい画像投稿しちゃおうかな～

ああ、もう投稿しちゃおう！」

スイレンママ

「まって！ 入れますから。
だから…投稿だけはしないで…」

おじさん

「そんなイヤイヤっだと僕が悪者みたい
じゃないですか。なんかいやだなあ」

スイレンママ

「い、入れてほしいです。入れてください」



おじさん

「ええ～、そんなに入れて欲しいんですか？

奥さんもとんだ好き者だなあ。

しょうがないですね～。じゃあローションを

塗りますよ。ささ、スカートをたくし上げて

パンティーを脱いでください」

スイレンママ

「そ、そんな」

おじさん

「パンティーを脱がなけりゃいれられないでしょ

ささ、その大きなお尻を向けてください」



スイレンママ
「うっ、くふううう…」

おじさん
「ああ、いいですね～、こんな大きなものを
ケツ穴が飲み込んでいきましたよお。こりゃいい！
なんてスケベなケツ穴だ！」

スイレンママ
「は、早く出してください」



おじさん

「ダメダメ～、何を言ってるんですか。
これからず～～と入れたままにするんですよ。
抜いたりしたら恥ずかしい写真投稿しちゃいますからね」

スイレンママ

「そ、そんな…
どうしたら抜いてくれるんですか？」



おじさん

「そうですね。では海に行きましょう。とっておきの穴場があるんです。恋人同士の奥さんとなら是非行きたいんですよ。いいですよねデートしたら考えますよ」

スイレンママ

「はい、海に行くだけなら」

おじさんはそのままスイレンママを連れて人気のないビーチに向かった。





おじさん

「見てくださいよ。この辺りのこの時間は誰も
いないんですよ。僕が見つけた。まるで二人の
プライベートビーチみたいですね。

なのでここで撮影会をしたいと思います！
とっておきのコレクションを用意したんですよ。
見てくださいよこれ？ この布の小ささがこだわり
なんですよ」



スイレンママ

「こ、こんな小さな布の水着、恥ずかしいです！」

おじさん

「もう、恋人なら着てくれて当然じゃないですか？

着てくれないんですか？」

…わかりました。ではこれを着てくれたら
データを削除するって条件はどうです？」

スイレンママ

「着ればデータを全部削除して
くれるんですね」



おじさん

「そうですよ、愛する恋人のためです。
水着を着て撮影させてくれれば
いいだけです」

スイレンママ

「わかりました。着ます。
…あの、更衣室は？」



おじさん

「ここは僕ら2人しかいないんですよ？
ここで着替えればいじや
ないですか？」

スイレンママ

「え？ でもそれじゃ…裸に…」





おじさん

「しょうがないですね。手伝ってあげますよ」

スイレンママ

「あっ、そんな…いやっ」

おじさん

「今更何を恥ずかしがってるんですか。
あなたのおっばいも おまんこも隅々まで
見て知ってるんですよ」



おじさん

「ええ？ 抵抗するんですか？

それじゃデータは削除できませんよ」

スイレンママ

「やります！ 着替えますから！」

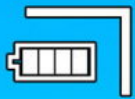


おじさん

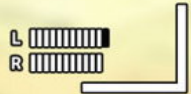
「そうです、そうです。それでいんですよ。
生まれたままの姿を僕に捧げてください。」

「んん～、野外で、しかもこんな開けたビーチで
全裸になるなんて、最っ高だ～！
もちろんこんなシチュエーション、動画に収め
ないわけありませんね～、ぐふふ」

REC



AUTO



REC

おじさん

「ああ、いい！ こんな間近でいやらしい姿を
カメラに収められるなんて最高だ。はあはあ。
いい！ いいですよ奥さん！」

「やはりこんな素晴らしい事、一人で楽しむなんて
もったいない。友達を呼びましょう！」

AUTO





カメラマンさん
XXX-XXX-XXXX



おじさん

「ああ、カメラマンさん、もらったアドバイス通りにしたらうまく行ってますよ。すぐに来てくれますか？」

「え？ やまおとこさんやつりびとさん達も呼べる？ いいじゃないですか。是非呼んでください」

「多い方が楽しいですよ。ビーチに人が増えてしまう前に急いでくださいね」

ピッ

REC



AUTO



REC

おじさん

「2人きりもいいけど、これからの事考えたら流石に一人じゃ難しいからねえ、みんなでやるなら勇気も出て色々出来そうです」

「しかし、なんてマイクロビキニが似合う人なんだろう。このいやらしい身体をもっと映像に残したい」

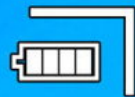
「おや？」

AUTO



L
R

REC



AUTO



REC



おじさん

「しかも爆乳で乳輪まではみ出しているんだから。

ぐふふ。

こういうのは本人は気が付かない物なんですね。

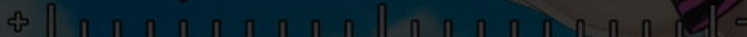
そろそろ教えてあげましょうか」

「奥さん、言いにくいんですけど」

スイレンママ

「な、なんででしょうか。少し人が集まってきました」

AUTO



REC

おじさん
「それは奥さんがセクシー過ぎるからです」

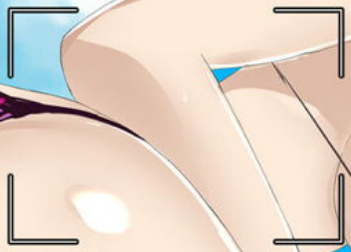
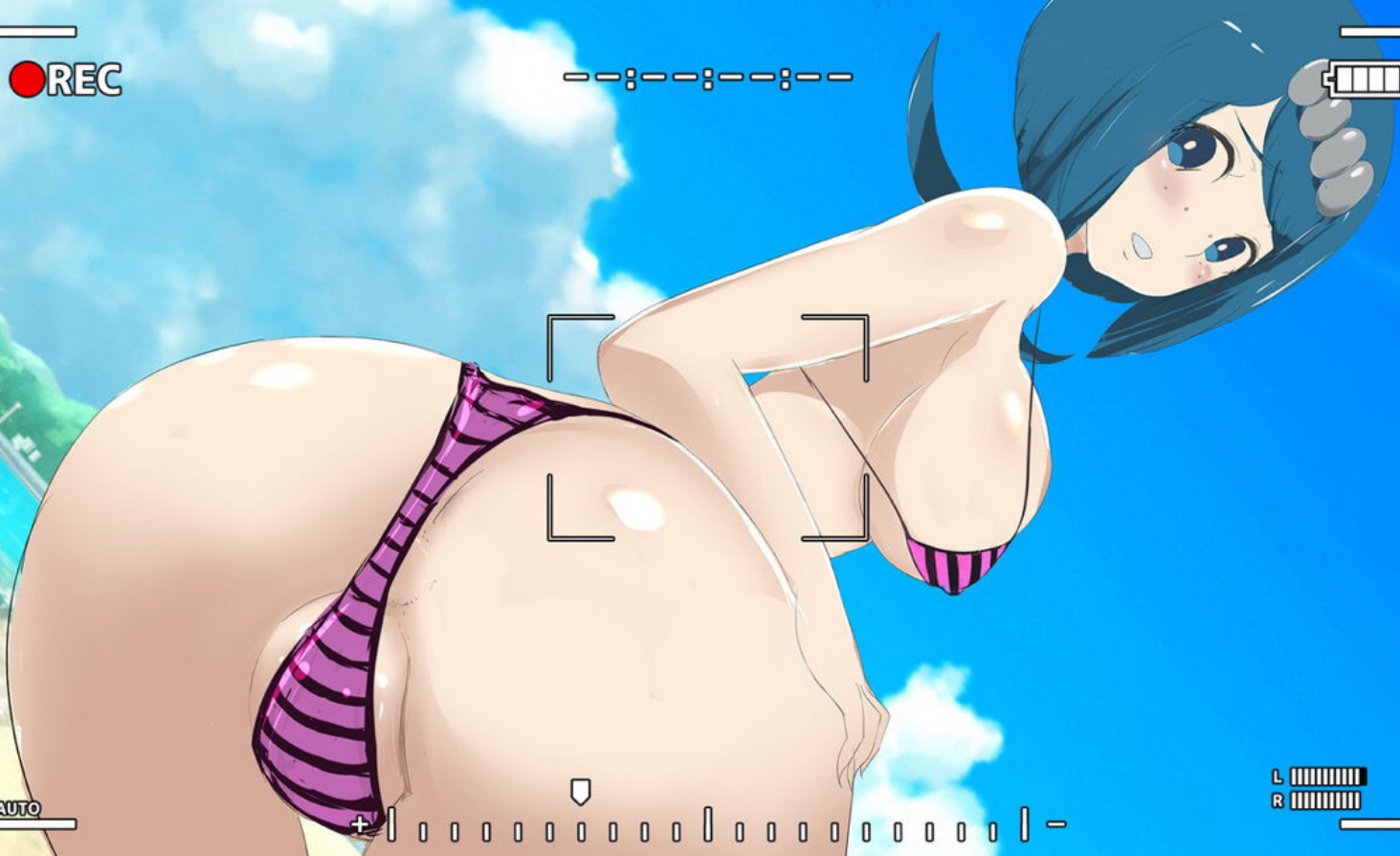
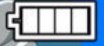
スイレンママ
「こんな小さな水着を着せるからです」

おじさん
「そうなんですけど、それだけじゃないというか…
実は乳輪がはみ出しているんですよ」

AUTO



REC



AUTO



L R



REC

スイレンママ
「えっ? …いやあ!」

おじさん
「ぐふふ~かわいいなあ」

カメラマン
「おーいおじさん。
みーんな連れてきたよー!」

つりびと
「やや、これはね、なんともね、
素敵なお美人だね!」

AUTO

L
R

REC

やまおとこ

「これはスゴイな。こんな水着を着た人を
生で見るのは、はじめてだ、ワシ」

スイレンママ

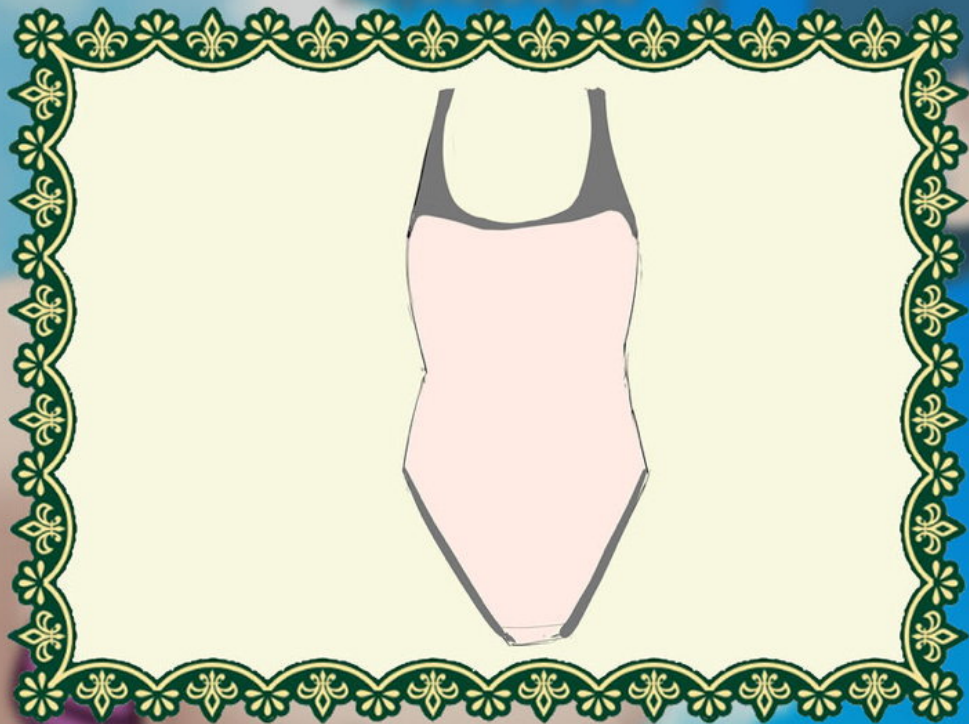
「いつのまに人が…こ、こんな恥ずかしい
水着きれません！」

おじさん

「う～ん、わかりました。それじゃ別の
水着を着てもらいましょう。
それ脱いでコレ来てください。」

AUTO

L
R

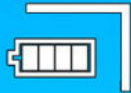


スイレンママ
「更衣室！！」

おじさん
「しょうがないな～、そのシャワー室で着替えて
きてください」

しばらくするとシャワー室から白のワンピース水着に
着替えたスイレンママが現れた。

REC



AUTO



REC



スイレンママ
「…お待たせしました」

おじさん
「おお、素晴らしい。隠れている部分が多くても魅力が
損なわれませんか。さすが奥さん」

やまおとこ
「こいいうのも悪くないな」

AUTO



REC



AUTO



REC



つりびと
「う～ん、でもね、さっきの見ちゃうとインパクトにね。
かけません？」

カメラマン
「…マジィ？ う～ん…じゃあこういうのはどう？」

AUTO





おじさん

「水鉄砲ですか？ 水なんか掛けてどうするんです？」

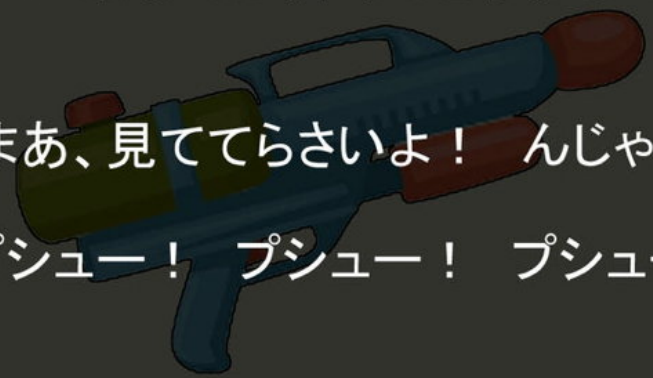
カメラマン

「まあ、まあ、まあ、見てて下さいよ！ んじゃ、いくよー！」

プシュー！ プシュー！ プシュー！ プシュー！

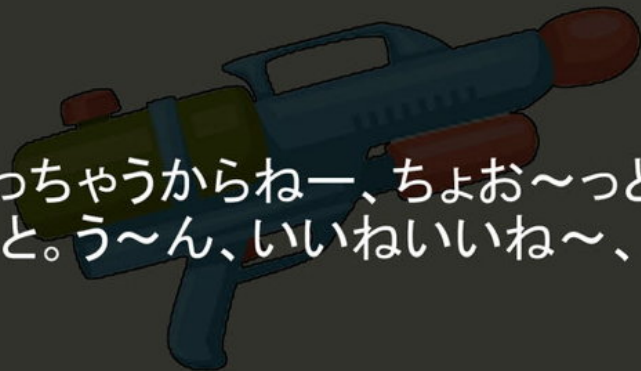
スイレンママ

「あんっ」

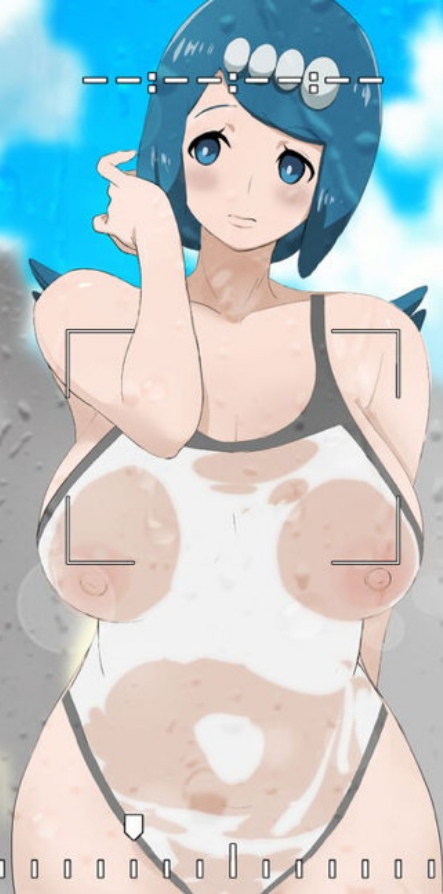
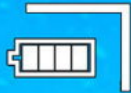


カメラマン

「すぐに終わっちゃうからねー、ちょお~っとの我慢してて
くださいよっ。う~ん、いいねいいね~、良い感じい♥」



REC



AUTO



REC



おじさん

「おお！ コレは！ まさか濡れると透けるとは…！」

つりびと

「こ、これはね、いいね！ こういうのね、
たまらないね！」

カメラマン

「ああ～ん、レンズに水滴が付いちゃったよ～。
ふきふきしましょ」

AUTO



REC



AUTO



REC

おじさん

「奥さんもっと胸をそらせて手をどけてください。
キレイな体が隠れて見えませんよ」

スイレンママ

「は、はい」

カメラマン

「布面積が大きくてもこれならいいでしょう？
エロキャワイイ～！」

AUTO

REC



AUTO



REC

カメラマン

「ええ～、それを何に
使うんですか～？」

おじさん

「それ聞いちゃいます？」

やまおとこ

「ははははははは」

AUTO



REC

---:---:---:---



AUTO

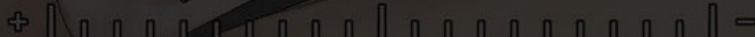


REC

つりびと
「お、お、おまんこもも透け透けでね
…もう変態だね」

やまおとこ
「ああ、もう少し足を開いて
もらえないもんかね。
もっとうっ…」

AUTO



カメラマン

「あはは、そーだ！

じゃあ透けないワンピースの水着を用意
しちゃうよー！ 僕、そこのホテルに部屋を
とってあるからみんな行かな〜い？」

おじさん

「いいですね。ささ、上着を貸すので奥さんも
ついてきてください」



ホテル

カメラマン

「奥さ～ん、ここなら恥ずかしくないっしょ～。
さあ、水着脱いでくださ～い」

スイレンママ

「何をするんですか？ その絵の具は何ですか？
水着はどれですか？」

カメラマン

「ノン、ノン、ノン、水着はコレで描くんで～す、奥さん。
この世で1つしかない描いた水着なんですよ～。
キャワイイネ～！」





おじさん

「水着って、ボディペイントの事だったんですね！」

カメラマン

「そうですよ～。これなら透けないし恥ずかしくないっしょ？」

スイレンママ

「そんな。描いた水着なんて…。
裸で居るってことじゃないですか！」



おじさん

「そうですけどちゃんと隠れますよ。
それともなにもしない全裸のまま海岸を歩きたいんですか？ 私はかまいませんけど」

スイレンママ

「それは…そんな事できません」





おじさん

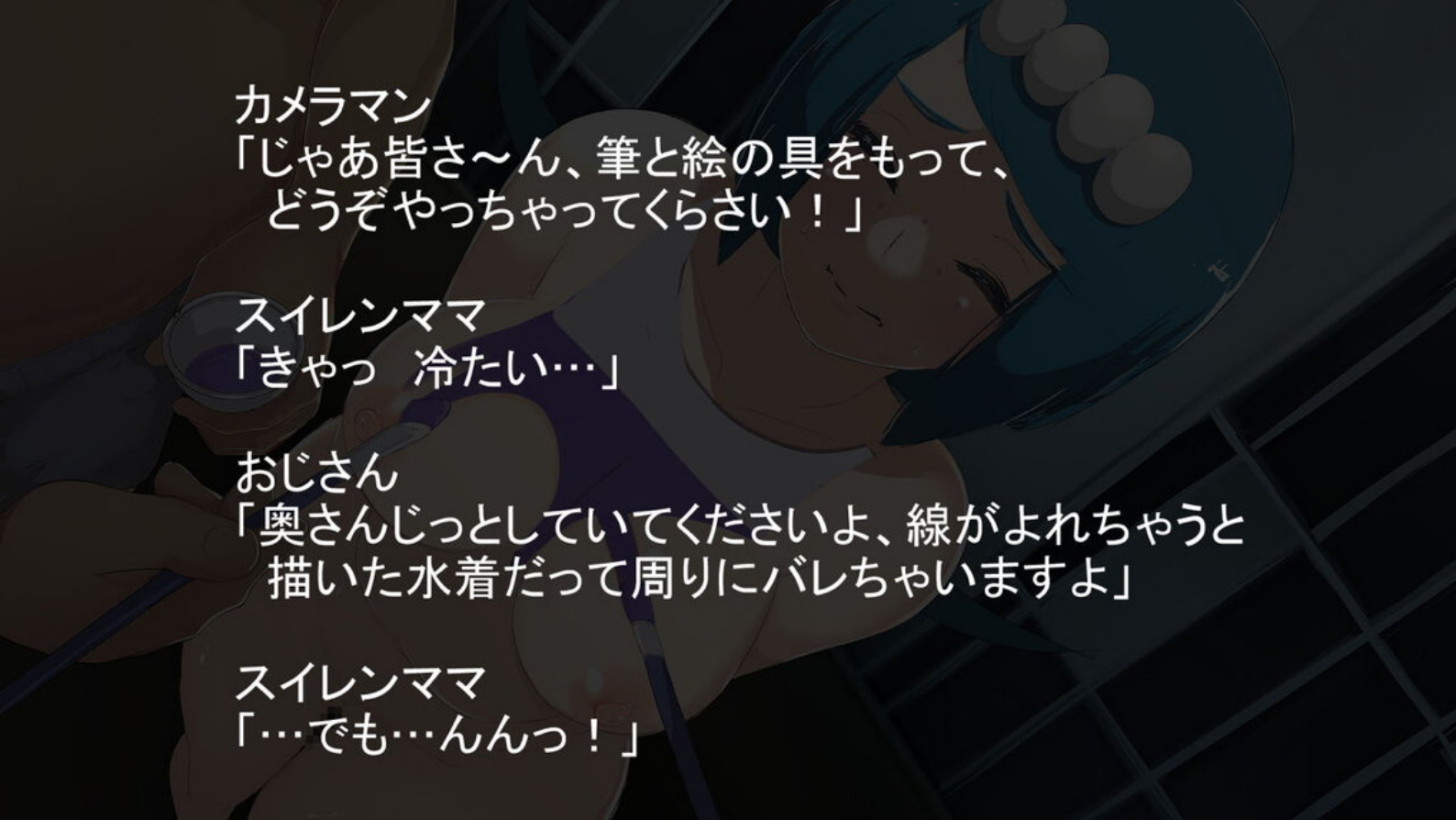
「じゃあボディペイントしていいって事で
きまりですね。大丈夫ですよ、しっかり描けば
ちゃんと水着に見えますから」

まさか水着がボディペイントの事だったとは思
いませんでしたよ。そういえばカメラマンさんの
コレクションにありましたね。アレすごく憧れて
いたんですよお」

やまおとこ

「ワシも好きだ。是非やってみたかった！」





カメラマン

「じゃあ皆さ～ん、筆と絵の具をもって、
どうぞやっちゃってください！」

スイレンママ

「きゃっ 冷たい…」

おじさん

「奥さんじっとしててくださいよ、線がよれちゃうと
描いた水着だって周りにバレちゃいますよ」

スイレンママ

「…でも…んんっ！」





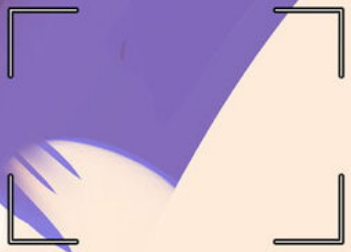
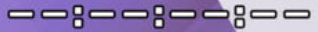
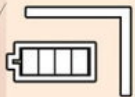
おじさん

「楽しいな～、こんなセクシーな裸体に絵の具を塗れるなんて幸せ！」

やまおとこ

「これは、たまらんな！」

REC



AUTO



REC

やまおとこ

「乳首は隠さないとな。しっかり塗ってやろう」
こう…クリクリッとな」

スイレンママ

「ああ…んんっ ちよつと…あん♥」

やまおとこ

「おや？ 乳首が立ってきた。感じているのかな？
奥さんはこういう事されると気持ちいいのかな？
好きなのかな？」

AUTO

L 
R 

REC

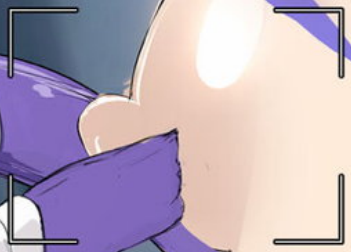
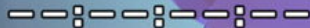
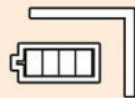
スイレンママ
「ちがっ…んんっ 違います」

やまおとこ
「そうなのか。こんなに一部だけ硬くなってしまうと
塗りむらができってしまうからな。念入りに塗らないと
いけないな。丁寧に塗らいと気になるなワシは」

AUTO

L
R

REC



AUTO



REC

おじさん

「私も手伝います。乳首は丁寧に塗らないと
描いた事に気が付かれてしまいますからね」

スイレンママ

「あ…んんっ…」

AUTO

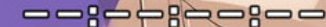
L 
R 

カメラマン

「乳首にこだわるのもいいけど、そろそろ下も塗ってあげましょう～。まずはお腹周り、おへそから丁寧に塗ってあげてください」



REC



AUTO

REC

やまおとこ

「そうだな、水着にみえるよう丁寧に塗ってやろう」

カメラマン

「奥さん～、手で隠されると大事な所が濡れませんよ～。

丸見えになってもいいんですか～？

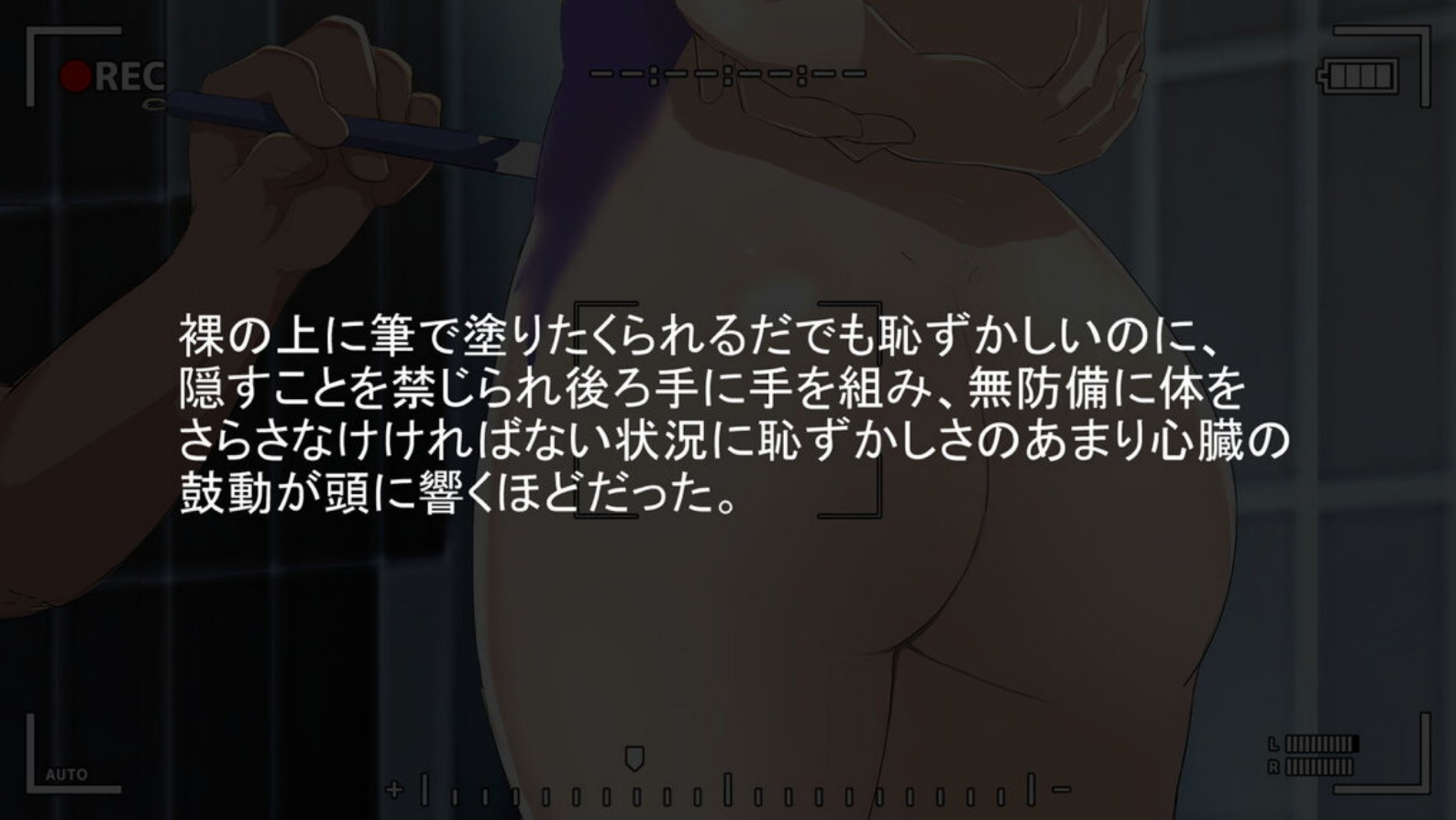
作業の邪魔になるので手は後ろに組んでね～」

スイレンママ

「は…はい」

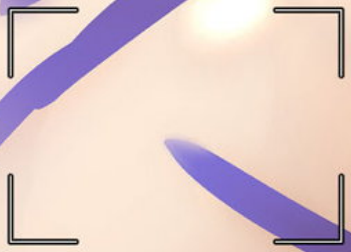
AUTO

L
R



裸の上に筆で塗りたくられるだけでも恥ずかしいのに、
隠すことを禁じられ後ろ手に手を組み、無防備に体を
さらさなければいけない状況に恥ずかしさのあまり心臓の
鼓動が頭に響くほどだった。

REC



AUTO



REC

カメラマン

「おまんこは大陰唇から丁寧に、
丁寧にお願いしますよ〜」

つりびと

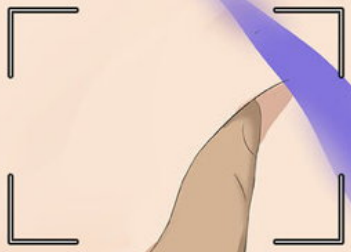
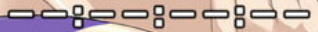
「自分もね、参加したいんだけどね、いい？
お尻をね、塗りたいたんだけど」

おじさん

「どうぞどうぞ、しっかり塗ってあげてください。
それと奥さん、手は後ろに組んでもらえますか？
そうそう、おまんこを隠そうとしちゃ駄目ですよ」

AUTO

REC



AUTO



REC

つりびと

「すごいね！ これはたまらないね！

我慢できないね！

なんて大きくて柔らかいお尻なんだろうね」

「きめ細やかな肌にしっとり

手に吸い付くもちもちとした感触がね。

もうずっとなでまわしていたいね！」

AUTO

L
R

REC

おじさん

「つりびとさん、ちゃんと水着を描いてあげてください。そうしないと奥さんのお尻が丸出しになってしまいますよ」

つりびと

「こんな美しいお尻を隠してしまうなんてね。罪深いね。こんな素敵なお尻はみんなに見せてあげたいね。あっ、でも仕事はちゃんとやりますね」

「…でも、弾力がありすぎて塗りにくいね。あっ、奥さん少し足を開いてね。アナルを塗りたいからね」

AUTO

L
R

REC

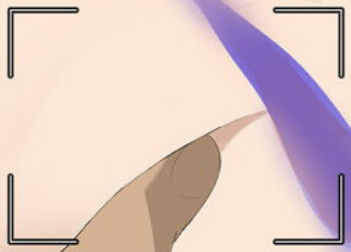
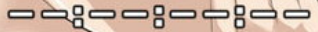
スイレンママ
「えっ？ でも…そうしたら…」

つりびと
「これ以上ね、何が恥ずかしいのかね？
もう十分ね、恥ずかしいじゃないかね！」

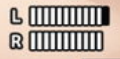
AUTO

L
R

REC



AUTO



REC

スイレンママ
「あっ！！」

つりびと
「…えっ！？ コレはなに？
なにか詰まってるね！
コレなに！？」

おじさん
「それアナルプラグです。
私が挿入しました」

AUTO

L
R

REC

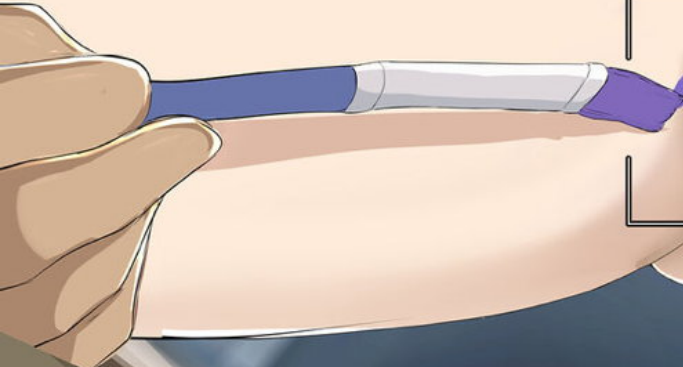
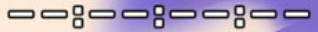


つりびと
「驚いたね。奥さん調教されてるなんて！
なんてドスケベな奥さんなんだろうね！
エロ過ぎでだね！ もう最高だね！」

AUTO



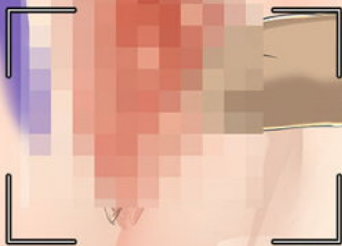
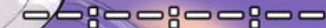
REC



AUTO



REC



AUTO



REC



おじさん
「そうですね、もっと広げないと筆が入りま
せんよね。ぎゅ〜っと広げましょう。
中までちゃんと塗りこみますよ」

つりびと
「自分もね、手伝いますよ。
2人で中まで塗りこみましょうね」

AUTO



REC



ア

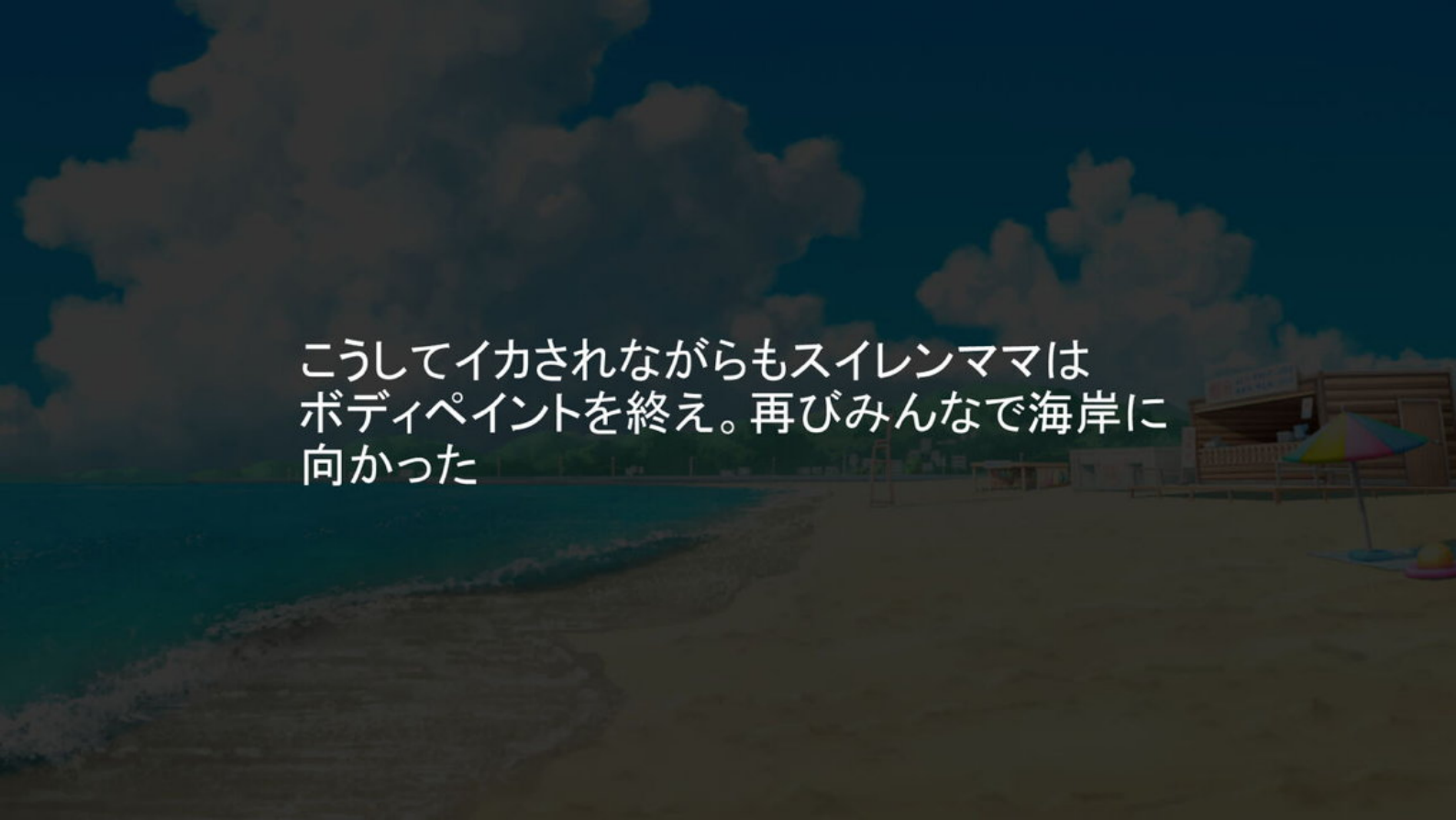
ジュン

||
フ



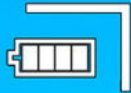
AUTO



A beach scene with a wooden building, a colorful umbrella, and waves in the background. The text is overlaid on the image.

こうしてイカされながらもスイレンママは
ボディペイントを終え。再びみんなで海岸に
向かった

REC



AUTO



L 
R 

REC



スイレンママ
「本当にこのまま歩くんですか？」

おじさん
「当然ですよ。そのためにここまで頑張って準備したんじゃないですか。ああ、綺麗だ。綺麗ですよ奥さん」

やまおとこ
「すごい、実は裸だとは興奮するな、ワシ」

AUTO



REC



カメラマン

「撮影会、始めちゃいますよ～。
さあ皆さんもカメラの準備をして盛り
上げましょう！」

撮影会をしているとどんどん人が集まってくる。

AUTO



REC



AUTO



REC



おじさん

「奥さん、手をどけてください。変に隠すと描いた水着だってバレちゃいますよ」

スイレンママ

「は、はい」

つりびと

「別の写真も撮りたいですね。
また水鉄砲使ってみますか？」

AUTO



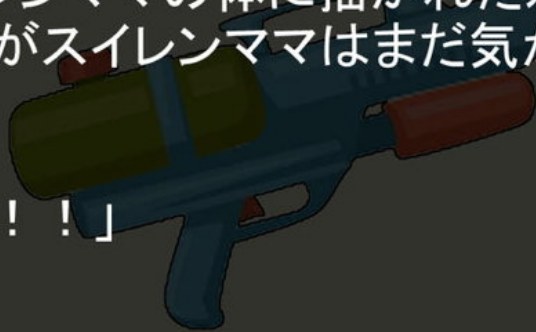


スイレンママ
「あっ、冷たい!」

水鉄砲でスイレンママの体に描かれた水着が少しずつ流れ落ちていく。だがスイレンママはまだ気が付いていない。

やまおとこ
「おお、これは!!」

つりびと
「おまんこがね、丸見えですね、アレ奥さん気が付いてないんですかね？」



カメラマン

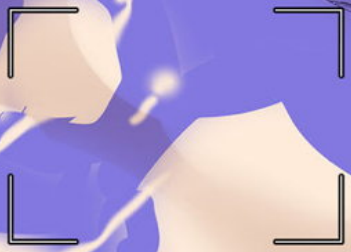
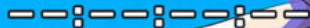
「胸が大きすぎて下がどうなっているか確認できないんだらうね～。巨乳の女性にはよくある事なのよね～。もっと絵の具を落としていきましょう～」

プシュー！ プシュー！ プシュー！ プシュー！

つりびと

「すごいね、どんどん落ちていくね」

REC



AUTO



REC

やまおとこ

「下半身だけ丸見えというのが、
またそそるな、ワシ」

おじさん

「無防備におまんこをさらしてくれるのも
最高ですが、そろそろ教えてあげましょうか。
奥さん、申し訳なんですけど水鉄砲をかけて
いたらですね、その…」

スイレンママ

「はい？ どうしたんですか？」

AUTO

REC

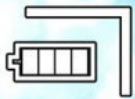
おじさん
「描いた絵の具が落ちてですね、
下半身の水着が消えてしまっ
ているんですよ」

スイレンママ
「…え？ いやあああ！！」

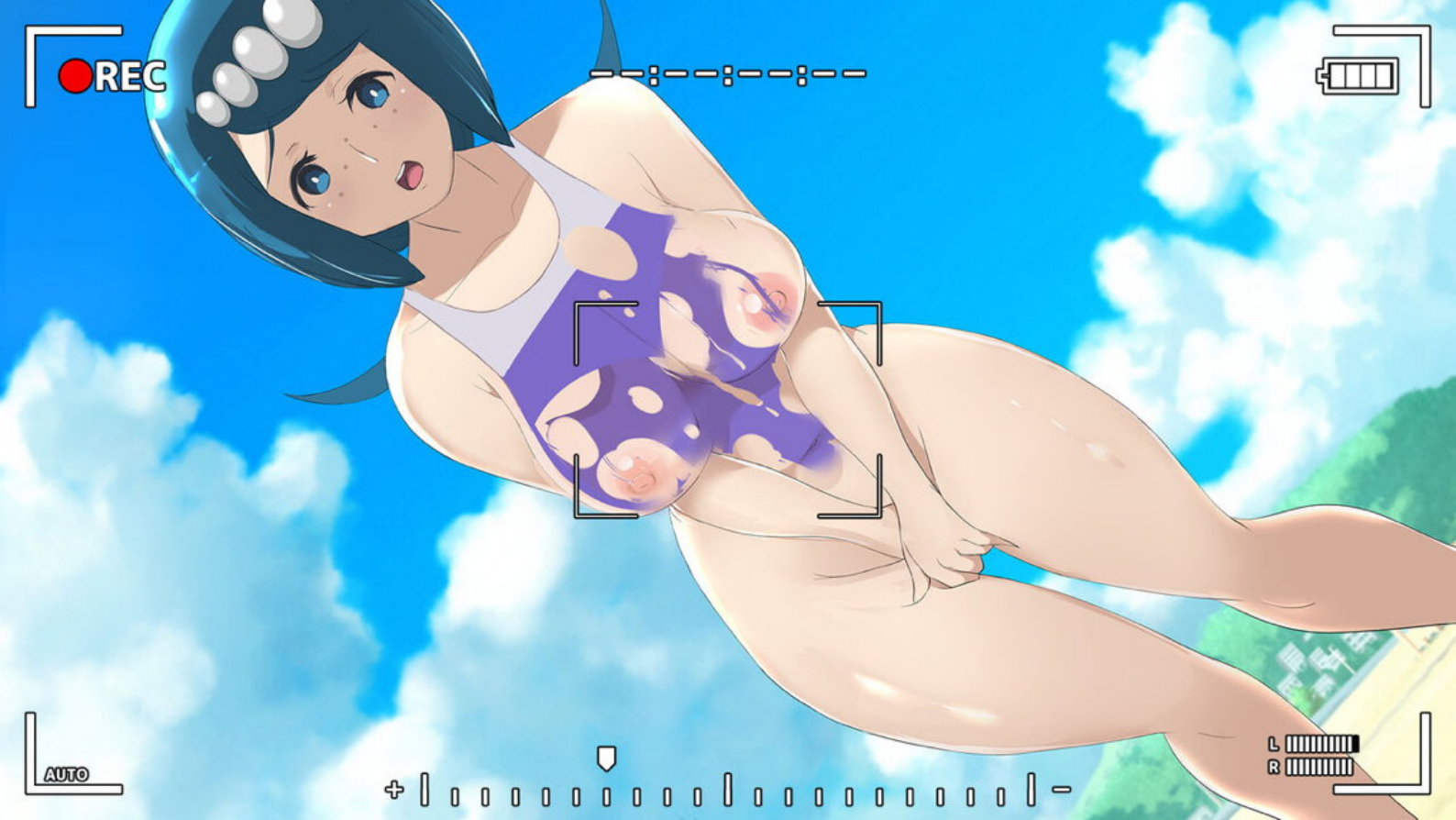
おじさん
「いまさら隠したって遅いですよ。
みんな奥さんのおまんこを堪能
してましたから」

AUTO

REC



AUTO



REC

スイレンママ

「なんてことするんですか！
ひどい！」

おじさん

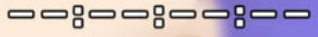
「だってこんな素敵な身体！、
絵の具とはいえ隠しちゃ
もったいないじゃないですか」

「ねえ？ 大事な所もちゃんと
見てもらいましょうよ
ホラ、手をどけて」

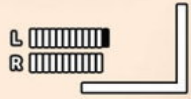
AUTO



REC



AUTO



REC



スイレンママ
「ちが、違います」

おじさん
「うそだ！ ほら、クリトリスもちょっと
剥いただけでわかりますよ！
充血して小さなおちんちんみたいに硬く
なってきてますよ」

「奥さんは全裸でボディペイント姿で
歩きまわされて感じていたんだ！
こういう恥ずかしくて変態な事をされると
感じてしまうんだ！」

AUTO



REC



AUTO



REC



おじさん

「ねえ奥さん、あなたは野外でこんな大勢の
人に裸をみられて感じてしまう変態だった
んですよ！」

スイレンママ

「そんな事…ありません」

おじさん

「じゃあなんでこんなにおまんこが濡らして
クリトリスを勃起させてるんですか！」

AUTO



REC

おじさん

「欲しいんでしょう？」

「今まさに濡れたおまんこに極太のチンポを
ねじ込んで欲しいんじゃないですか!？」

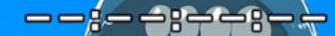
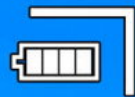
「いいでしょう! 実はですね、興奮して
勃起したままだったので、すでに避妊具を
装備してたんですよ。用意いいでしょう?」

「だから安心してこのまま野外セックス
しましょう!」

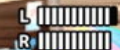
AUTO

L ■■■■■■
R ■■■■■■

REC



AUTO



REC

おじさん

「ホラ、もおっと足を開いてください。
もっとうです。…もう、仕方ありませんね、
それじゃ僕が抱えてあげますよ」

「…っしょっと！
結構重いな～」

スイレンママ

「あっ …いやあっ
こんな野外で
…人前でなんて！」

AUTO

REC

おじさん

「奥さん、気にしすぎですよ。
みんな興奮して喜んでるじゃないですか。
もっと心を開放して楽しみましょう！」

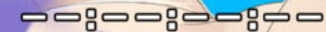
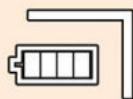
「なによりゴムをつけてセックスしてるって
時点でスポーツみたいなもんですよ」

スイレンママ

「でも、でも…ああっ！」

AUTO

REC



AUTO



REC

まるで少女のようにつるつるの割れ目を無理やり
こじ開けておじさんの極太チンポが強引に小陰唇を
かきわけて膣内へと潜り込んでいく。

おじさん

「うはあ…ぬるぬるして暖かくて気持ちいい～！
子供3人も生んでるからもっとガバガバなのかと
思っていたのにそんなに使い込んでないんですね。
いい具合だ～。位置もすごくいい！」

AUTO

L
R

REC

おじさん

「奥さんとは体の相性もよさそうですね。
さすがは恋人同士だ。やはり僕たちは結ばれる
運命にあったんですよ」

つりびと。

「すごいね。おじさんの極太チンポが
ズブズブ入っていくね！」

おじさん

「くう、もう根元までじゅぼじゅぼ入ってますよ。
奥さん、僕のチンポを根元までくわえ込んでるの
わかりますか？ ホラ、もっとおまんこに集中して！」

AUTO

REC

おじさん

「今まさに奥さんのおまんこは極太チンポが出たり入ったりしてますよ！ みんなその恥ずかしい所を目を皿のように集中して見てすよ！」

「興奮しますね、こんなエロい体をした美女が人前で公開セックスしてるんですから。どんな顔だろうと！ 興味津々ですよね！」

恥ずかしさのあまり顔を隠すスイレンママ。
だがこの騒ぎでどんどん次馬が増えていく。

AUTO

L
R

REC



AUTO



REC

おじさん

「いまさら顔を隠してどうするんですか。
みんなあなたの美しい顔は見てるんですよ」

「それよりさっきから私のチンポをくわえ
続けてるドスケベなおまんこは隠さなくて
いいんですか？」

「それともこのいやらしいドスケベ
マンコをもっと見てもらいたいん
ですか？」

AUTO



L 
R 

REC

スイレンママ
「ちがっ、違うの！
これは…んんっ」

おじさん
「少くらい顔を隠したってですね、奥さん。
あなたの美しさは隙間からでもわかるんです。
むしろ隠した方がエロいって気が付かないん
ですか？」

「風俗雑誌の顔出しNGの女の子
みたいで想像力がふくらんで余計に
エロいんですよ！」

AUTO



REC

おじさん

「いや、いやいやいや。ドスケベな奥さんの事だから想像されてより興奮してもらう事も計算なんじゃないですか？」

「その証拠に私腰うごかしていないの気づきませんでした？ 今は奥さんが自分で腰を振っているんですよ？」

スイレンママ

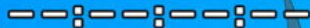
「そんな事…私っ、あああん、これは無理やりっ…いい…ん♥」

AUTO



L R

REC



AUTO



REC

やまおとこ

「おじさんの腰使いが絶妙すぎて徐々に動きを止めていったのに気が付かなかったんだな」

「とはいえこんな大勢が見つめる中、快楽に夢中にいなくて自分から腰を振るなんて、なんてドスケベな奥さんだろう」

AUTO



L 
R 

REC

やまおとこ
「中途半端にペイントが残っているのも汚い。
もう洗い落としてしまおう」

カメラマン
「そうですね～、中途半端な絵の具の残り
なんかは洗い落として綺麗なヌードの方が
いいスね」

スイレンママ
「ああ…いやん」

AUTO



REC



---:---:---:---
やまおとこはその無骨な大きな手でスイレンママの豊満な乳房をまんべんなく揉みしだき絵の具を洗い落としていった。

やまおとこ
「ここは念入りに洗わないとな。念入りに」

スイレンママ
「ああん…やさしく…」

やまおとこ
「注文なんて、自分から気持ちいい方法を要求するとは。
なんと淫乱な」

AUTO





スイレンママ

「え？ ちが…違うの…んん♥
敏感なだけで…ああっ」

乳首を執拗につまみ、撫でまわし、最後は口に含みながら
吸い続け、舌で何度も何度も舐めまわした。

スイレンママ

「あっ、あっ、あっあん」

おじさん

「あはは、乳首を吸われるたびにおまんこが
キュツ、キュツって締め付けて…気持ちいい～」



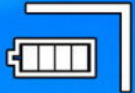
おじさん

「あはは、乳首を吸われるたびにおまんこが
キュッ、キュッって締め付けてきてますね。
こりゃ…気持ちいい〜」

カメラマン

「おお、キレイに絵の具落ちましたね。
綺麗な生まれたままの姿に
なりましたよ〜」

REC



アッ
アッ
アッ

ズ
ズ
ズ
ズ
ズ

アッ
アッ

アッ
アッ

AUTO



REC



おじさん

「奥さん、みんなあなたの恥ずかしい姿を、
美しい裸をみえていますよ。
どんな気分ですか？」

つりびと

「おじさん、おまんこね、具合はどうですか？
気持ちいですか？」

おじさん

「さっきからビクンビクンとチンポを飲み込む
動きをしてたまらないんですよ。そんなに
僕の精子が欲しんですか？」

AUTO



REC



つりびと

「そうだね、ゴムなんかいないね！
生でしたいってサインだね！」

おじさん

「そう？ やっぱりそうですね？
じゃあゴムなんかとっちゃいましょう！
つりびとさん、ちょっと奥さんを支えて
ください」

おもむろにコンドームを外すおじさん。ギンギンに
なったままの極太チンポをスイレンママのおまんこに
そのまま挿入していく。

AUTO



REC

スイレンママ
「え？ うそ！ ダメよ！
生はダメ！！」

おじさん

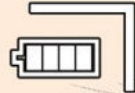
「奥さん、今あなたと私は恋人同士なんですよ。
恋人同士ならなら生なんて愛の証じゃないですか

ゴムなんかしていたら気持ちが悪くなってしまふ。
それは悲しい事ですよ。愛し合っているから生が
良いんです！」

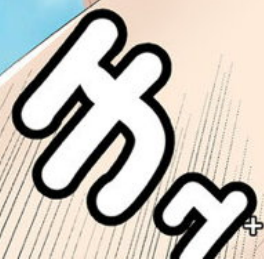
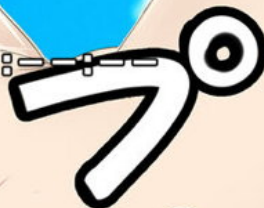
AUTO

L R

REC



アッ



AUTO



REC

スイレンママ
「いやあ！ だめよ」

おじさん
「うるさい、そらっ！！ ふん！」

AUTO

L
R

REC



スイレンママ
「ああ、いやあ！」

おじさん
「ホラ、この音をつ…聞いてください。
ドスケベまんこが極太チンポをヌップ、ヌップ
よだれをたらしながら飲み込んでいる音ですよ」

いやらしい音があたりに響きながら責められ続ける
スレンママ。わざと音が鳴るように腰を振るおじさん。

AUTO



REC



おじさん

「おまんこに神経を集中してください。
そしてそれを見知らぬ他人に見られなが犯されてる
自分を想像してください。フン、フン、フン！
…どうですこのドスケベな音！」

マシンのように軽快なリズムで激しく腰を振り
続けるおじさん。

AUTO





アッ
ウウ

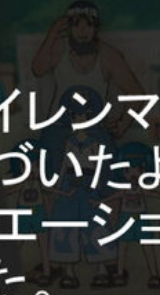
アッ
ウウ
アッ
ウウ

おじさん

「なんていやらしい音をたてるんですかね。
みなさん奥さんのおまんこの音を聞いて
興奮してますよ」

「音だけで勃起ものですよ。
なんていやらしいんだ。どんどん液が
あふれて僕の睾丸までしたたり落ちてる
のがわかりますよ。」





すると人だかりの向こうにスイレンママの家族がいるのが見える。こちらで何かをしてるのに気づいたようだ。周りをかこむ人々もあまりに現実離れしたシチュエーションに見てていいのか通報した方がいいのか困惑気味だった。

おじさん

「あれ？ 奥さん、向こうに見えるのは奥さんのご家族じゃないですか？」

スイレンママ

「えっ！！」



おじさん

「特徴ありますからね、子供たちなんかそっくりだ」

スイレンママ

「ちょっと…やめてください！

子供が！ 主人が！」

ビククウ！！！！

おじさん

「うっはっ！ いま一瞬すごい締め付けきましたね。

握り潰されたのかと思いましたよ」



「そんなに驚いたんですか？
そりゃそうですね。愛する家族に
こんなあられもない姿見られたら
大変ですもんね」

「…で・も！ それが良いんじゃない
ですか！ それが興奮するって
もんですよ！ いましかない最高の
快樂を楽しみましょう！」



スイレンママ

「馬鹿言わないで！

こんな事バレたらっ！ ああんっ」

おじさん

「こんなにチンポぐいぐいしめつけておきながら

ヤメロってどういう事ですか!?

しかも馬鹿、馬鹿って言いましたね」

「僕は人に馬鹿にされる事がなにより許せないんです。

見下したって事ですよね？」

スイレンママ

「ごめんなさい、あやまります、あやまりますからっ」

やがてスイレンママの家族はこちらに興味をもったようで近づいてくる。

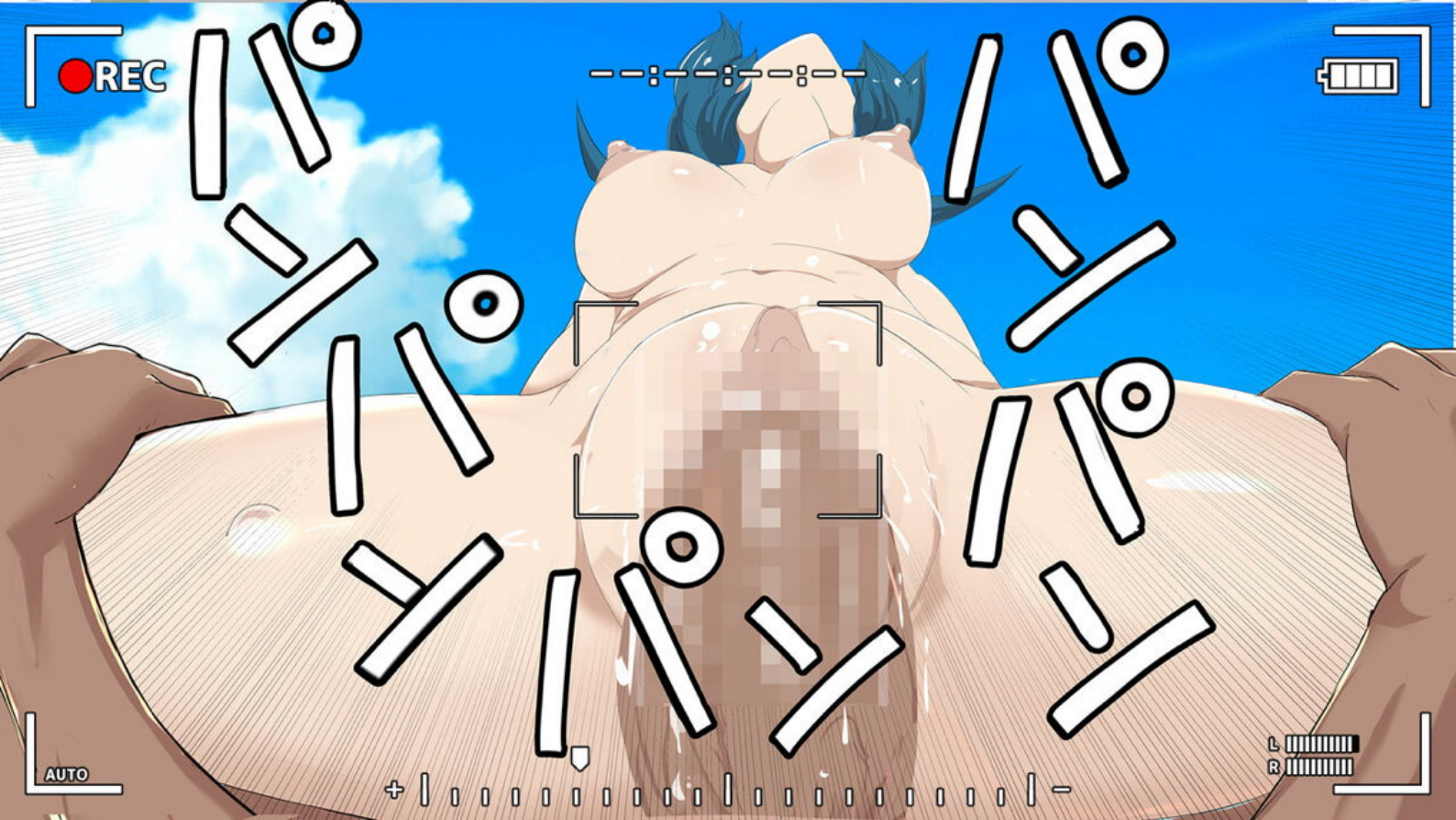
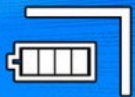
おじさん

「奥さん、ホラ！ 家族はこちらに近づいてきますよ。
あんまり人だかりがすごいで…興味をうつつ、
持ったんじゃないですかっ！ うつつ！」

スイレンママ

「やめて。やめて、やめて！」

REC



AUTO



REC



必死に逃げようともがくスイレンママ。
それをおじさんだけでなくやまおとこやつりびとが
抑え込み固定する。その状態からより一層激しく
腰をつき続けるおじさん。

おじさん

「おおっ！、なんか急におまんこの締め付けがきつく…
奥がなにか広がったような…これ…は…バルーン現象で
しょうか。相当感じてる証拠です…ね。フン、フン！」

つりびと

「バルーン現象ってなんですか？」

AUTO



REC



カメラマン

「オーガズムが近づくと膣の入り口が狭く、奥が広がる現象だね～。乳首やクリにも変化が出るからよ～く観察してあげてちょ～」

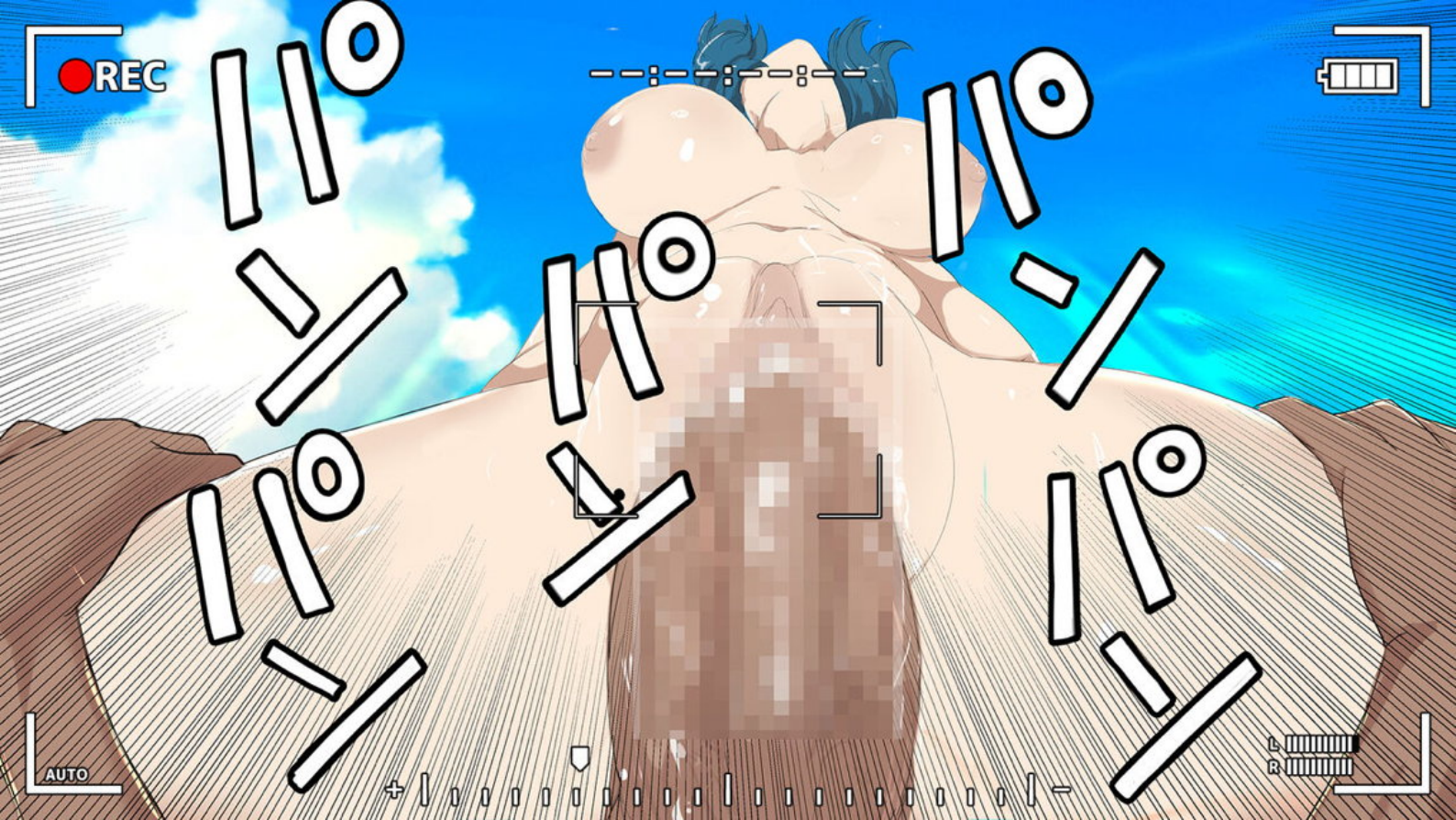
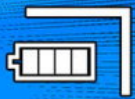
つりびと

「なるほどね。乳首がビンビンに立ってるね
クリトリスも恥ずかしいくらい勃起してる」

AUTO



REC



AUTO



REC

おじさん

「こんな状況でオーガズム迎えようなんて、なんて変態なんだ！
そんなに家族に見られたいんですか？ じゃあ見てもらいましょう！
ご主人に！ お子さんに！ ねえ！、ねえ！
あなたの一番エロい姿をっ！」

マシーンのように軽快なリズムで激しく腰を振り続けるおじさん。

AUTO

REC

スイレンママ

「お願い、何でもするからああああ！
かっ、家族の前 だけ…にはっ …あああああっ
子供と主人の…前っ ああっ！！
だけはやめててえええ！！！」

おじさん

「なんでも？ なんでもするんですか？
本当になんでもするんですか？」

スイレンママ

「するからあ 何でもするからああああ！！！」

AUTO



おじさん
「じゃあ、まずは膣内に出しますよ！
生で中出ししてもいいんですね？
中を出してってお願いしてください！」

スイレンママ
「いいっ！ いいからお出してえ！
お願い！！！！」

おじさん
「ああっいいい！ この…痙攣する感じの…
締め付け…おまんこが精子で満たして
欲しいって暴れてますよ！」

おじさん

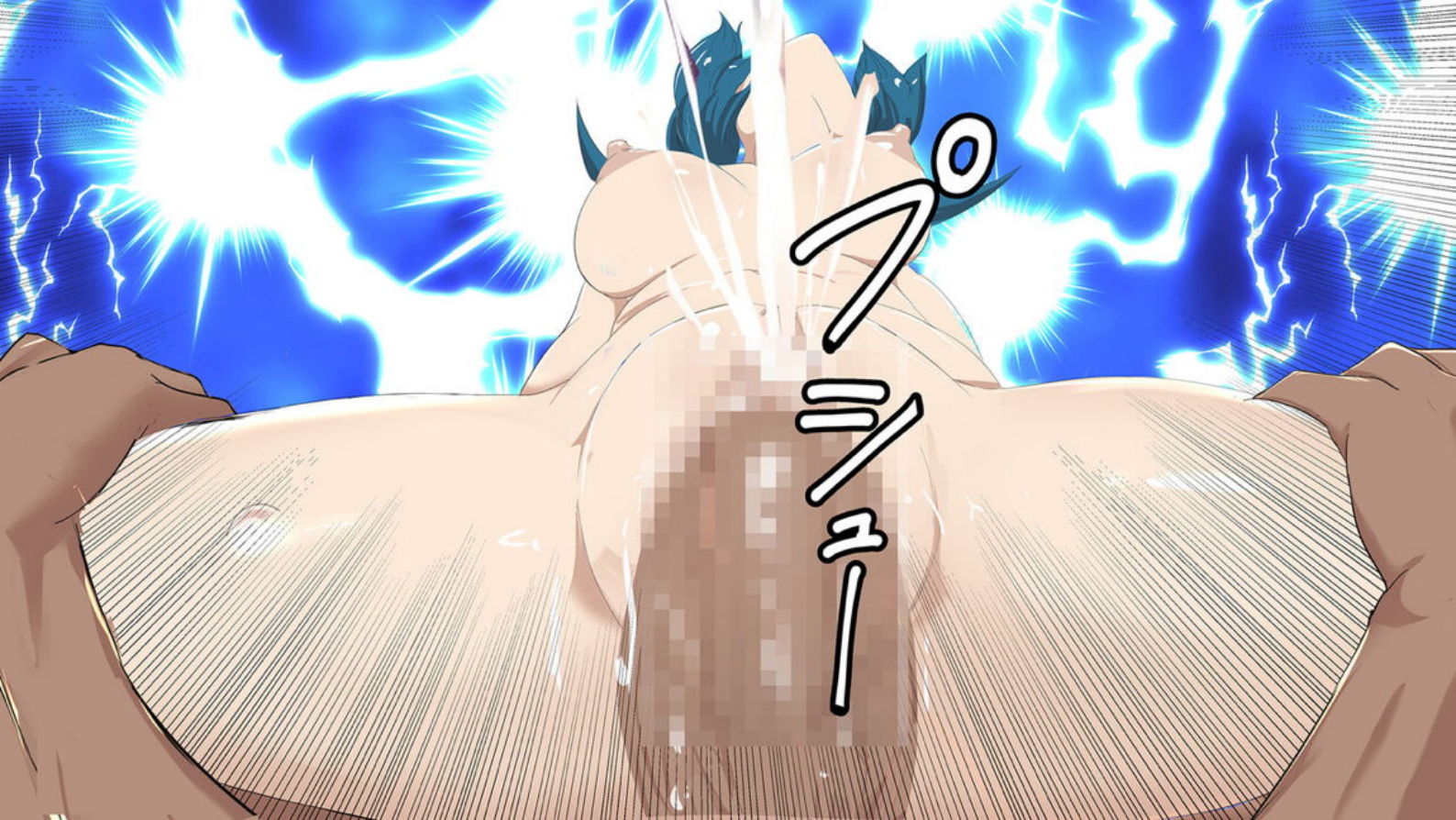
「ああっ…我慢できない！ 出す！
膣内で、生で！ 生で出す！
おおおおっ…僕のは特別濃いから
絶対…妊娠します…よおおお！
妊娠しろおおおおっ！！」

スイレンママ

「ええ!? いや、ダメ、ダメ～！
いやああああ！ …ああん！」

おじさん

「イクッ…おおっ…全部出るう！！」



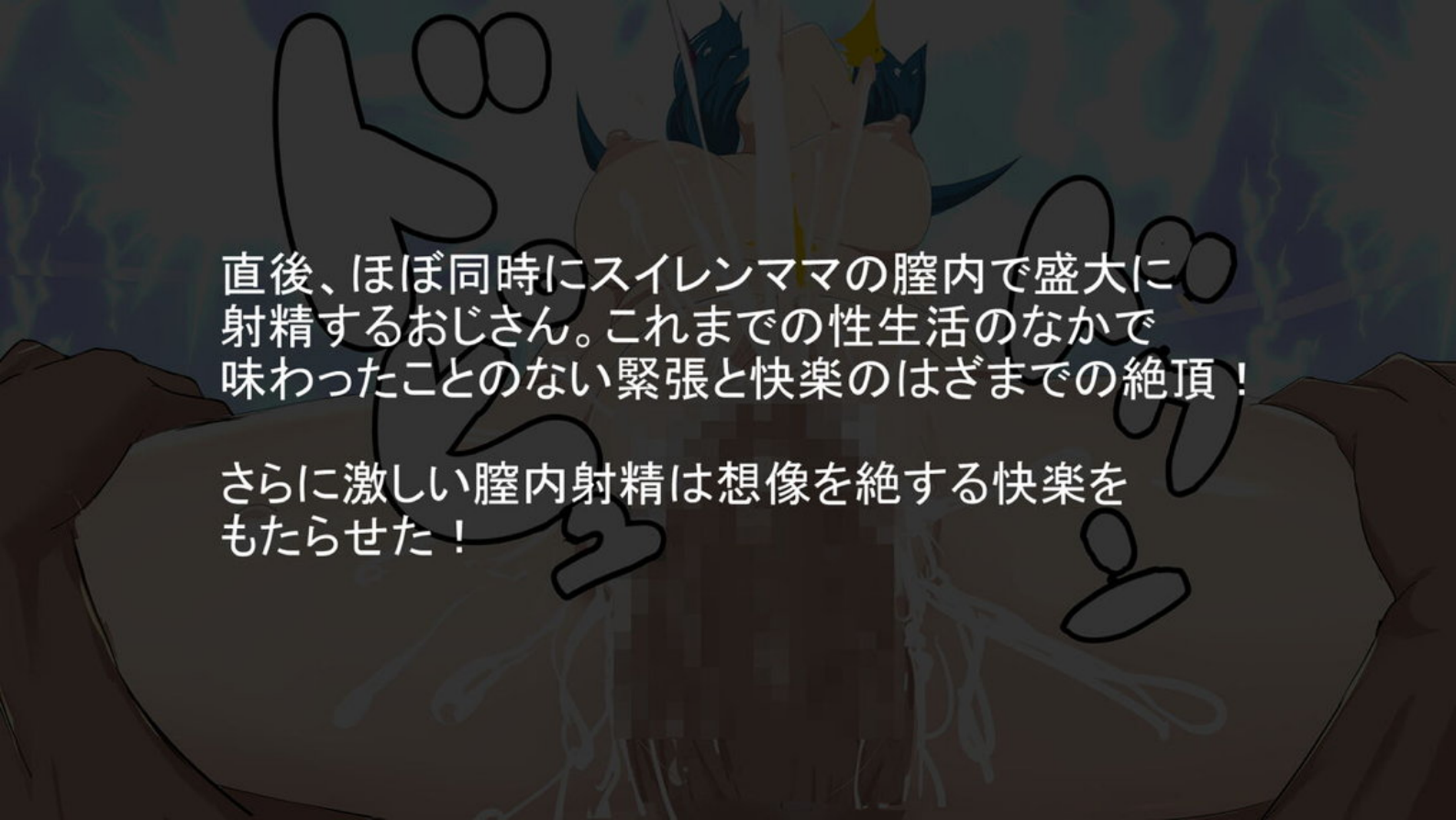


スイレンママ
「イ…クッ！！！！」

プシュー！！！！！！

盛大に潮を吹き絶頂を迎えるスイレンママ。

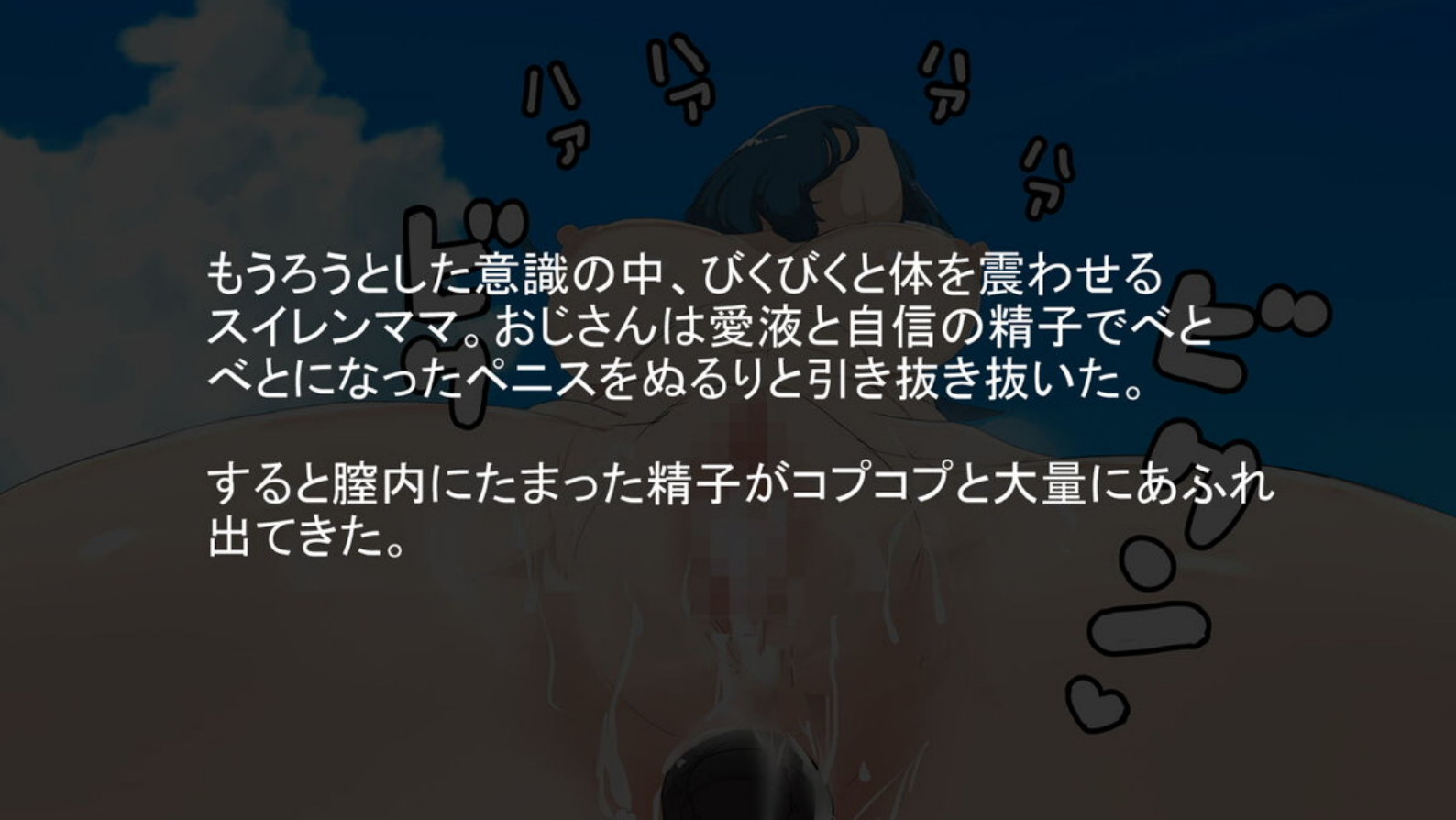




直後、ほぼ同時にスイレンママの膣内で盛大に
射精するおじさん。これまでの性生活のなかで
味わったことのない緊張と快樂のはざまでの絶頂！

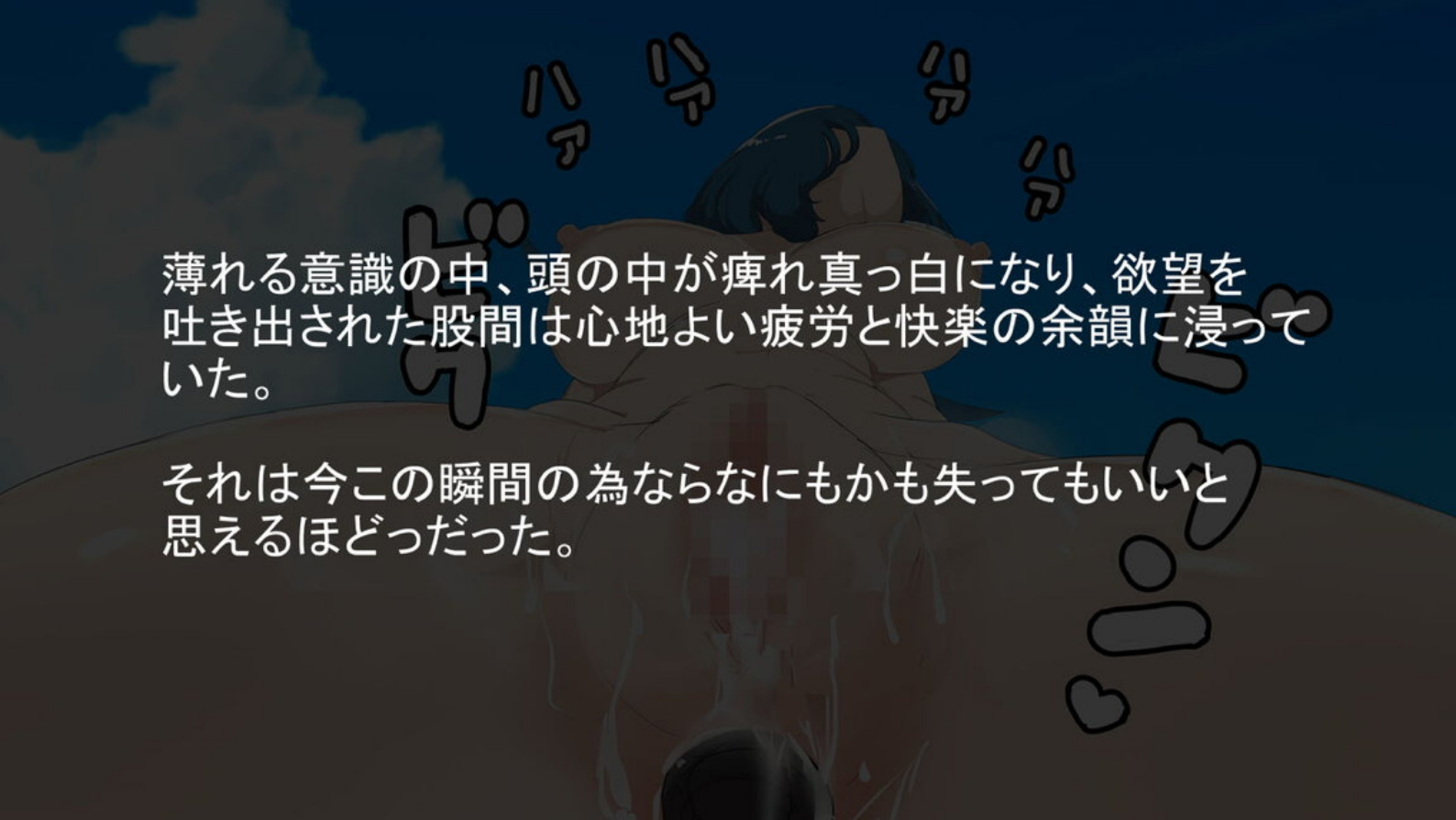
さらに激しい膣内射精は想像を絶する快樂を
もたせた！





もうろうとした意識の中、びくびくと体を震わせる
スイレンママ。おじさんは愛液と自信の精子でべと
べとになったペニスをぬるりと引き抜き抜いた。

すると膈内にたまった精子がコプコプと大量にあふれ
出てきた。



薄れる意識の中、頭の中が痺れ真っ白になり、欲望を吐き出された股間は心地よい疲労と快樂の余韻に浸っていた。

それは今この瞬間の為ならなにもかも失ってもいいと思えるほどだった。

気が付けばスイレンママの家族が目の前に迫ってきていた。あわててもバスタオルをかぶせるやまおとこ。

カメラマン

「はい！ 今日の撮影は終了です！
皆さん撤収してください」

やはり撮影だったのかと安堵の表情で去っていくまわりの人々。スイレンママの家族も珍しいものを見逃してしまったという感じで少し残念そうに見えた。



カメラマン

「あれが奥さんの家族ですか？
もし見られていたらすごい事になっただしょうね～」

「まあ僕らもただじゃ済まなかった
でしょうけどね。ちょ～っと派手に
やりすぎたかな？」

「もう浜辺では遊べそうに
ありませんね」

つりびと

「ええ？ これでおしまい？
自分はね、見てただけで
不完全燃焼なのね」

おじさん

「なにもこれっきりというわけじゃありませんから。
ねえ奥さん。約束通りデータはすべてお渡ししますよ。
…ただし、先ほどの約束がありましたよね」

「『何でもする』という約束が。今日はこれで解散し
ますが明日の朝、またホテルまで来てくれませんか？」

スイレンママ

「はあ、はあ、はあ 明日…ですか。
でも…もうこんな人前でなんて」

おじさん

「ああ、安心してください。もうこんなプレイは
しませんから。ちょっとしたコスプレの撮影会を
したいだけです。ねえカメラマンさん」

「それなら心配いりませんよね？ 来てくれたら
今日撮影したデータだってお渡ししますから」

スイレンママ

「そ、そういう事なら…」

おじさん

「はい、なので今日はゆっくり休んでください。

あ、宿までは車でお送りしますよ。では一旦着替えを取りにホテルまでいきましょう」

こうしてスイレンママを宿まで送り届けたおじさん。
スイレンママの家族にはばれないように裏口から送り、
宿の特別マッサージのサービスを受けていたというように
入れ知恵をした。

また明日の午前中に主婦限定の特別サービスがあるという理由で行け出すようアドバイスをした。

おじさん

「あっそれと1つ。アナルストッパーを外すのはいけませんよ。どうしても排便したくなった時以外は禁止ですからね」

こうしておじさんは宿を後にし、ホテルでみなと合流し、今後明日の計画を立てた。

宿までスイレンママを迎えにいったおじさん。二人は車でホテルまで来るとカメラマンの宿泊している部屋に向かった。

スイレンママ

「本当に撮影だけなんですよね？」

おじさん

「もう、そんなにおびえないでください。今日はあくまで撮影会ですからもう人前であんまプレイはしないので安心してください」





カメラマン

「奥さんおはようございま～す！今日は素敵な撮影会なので、早速ですがこちらの衣装をきてくださ～い」

スイレンママ

「なんですかコレは？」

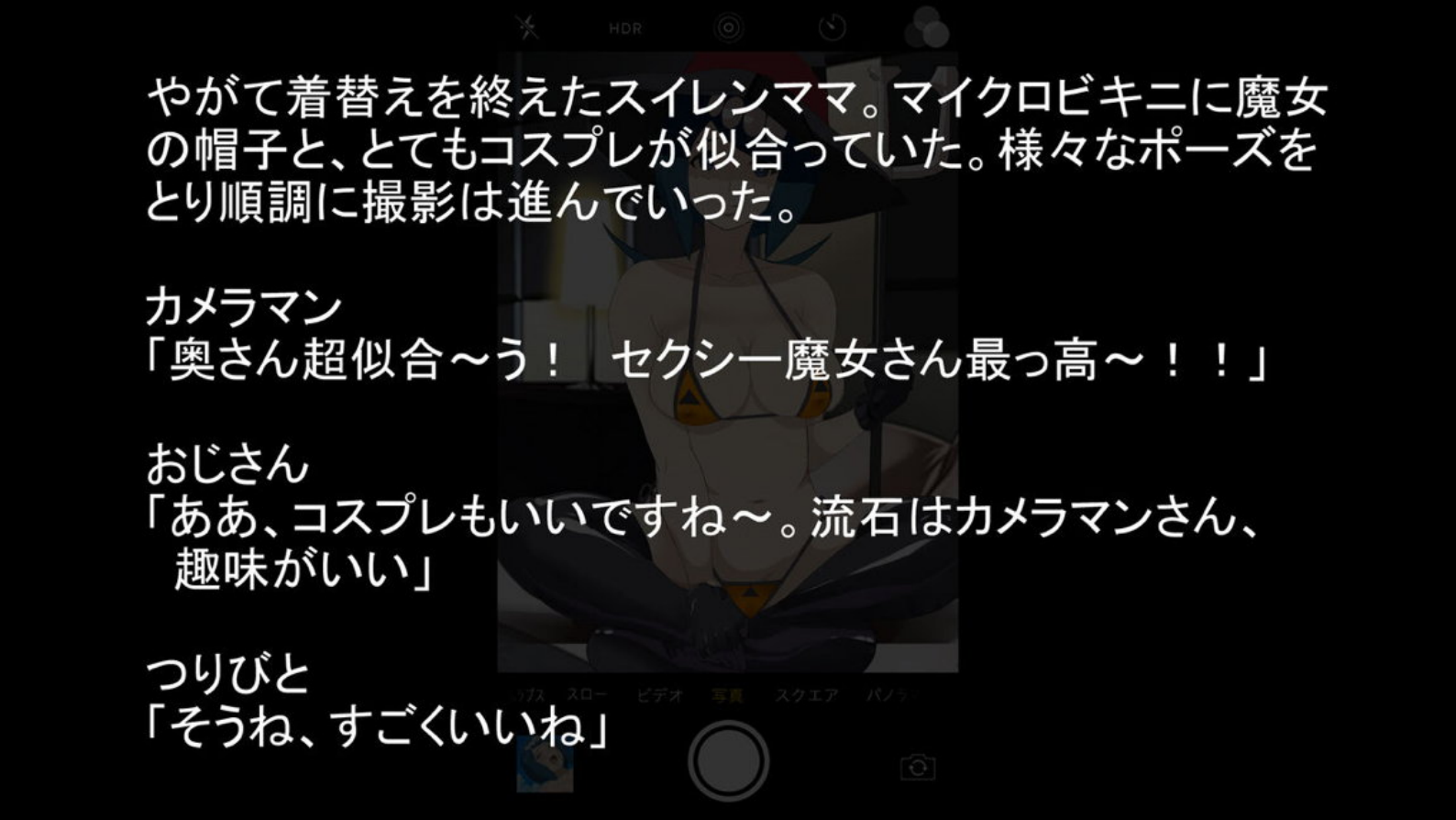
カメラマン

「セクシー魔・女でーす！もうじきハロウィンだから最・強！
キャワイイネ～！奥さん絶対似合っちゃうよ～！だ・か・ら
これ着て～！着替えはあちらでね♥」



1/57 f/1.8 スロー ビデオ 写真 スクエア パノラマ





やがて着替えを終えたスイレンママ。マイクロビキニに魔女の帽子と、とてもコスプレが似合っていた。様々なポーズをとり順調に撮影は進んでいった。

カメラマン

「奥さん超似合～う！ セクシー魔女さん最っ高～！！」

おじさん

「ああ、コスプレもいいですね～。流石はカメラマンさん、趣味がいい」

つりびと

「そうね、すごくいいね」

A background image of a woman with long dark hair, wearing a red hat and a white bikini with yellow accents. She is holding a black bag. The image is dimmed and serves as a background for the text.

つりびと

「あのね、ヤボな事を聞くようだけどね、アレは
いつ使うんですか？」

おじさん

「アレとは？」

つりびと

「ボディーペイントをしていた時にね、みたアナル
ストッパーがね、気になって、気になってね」

おじさん

「あはは、流石つりびとさんは目ざとい。
そうですね、そろそろ頃合いでしょうか」





おじさん

「奥さん、水着の下を脱いでくれませんか？」

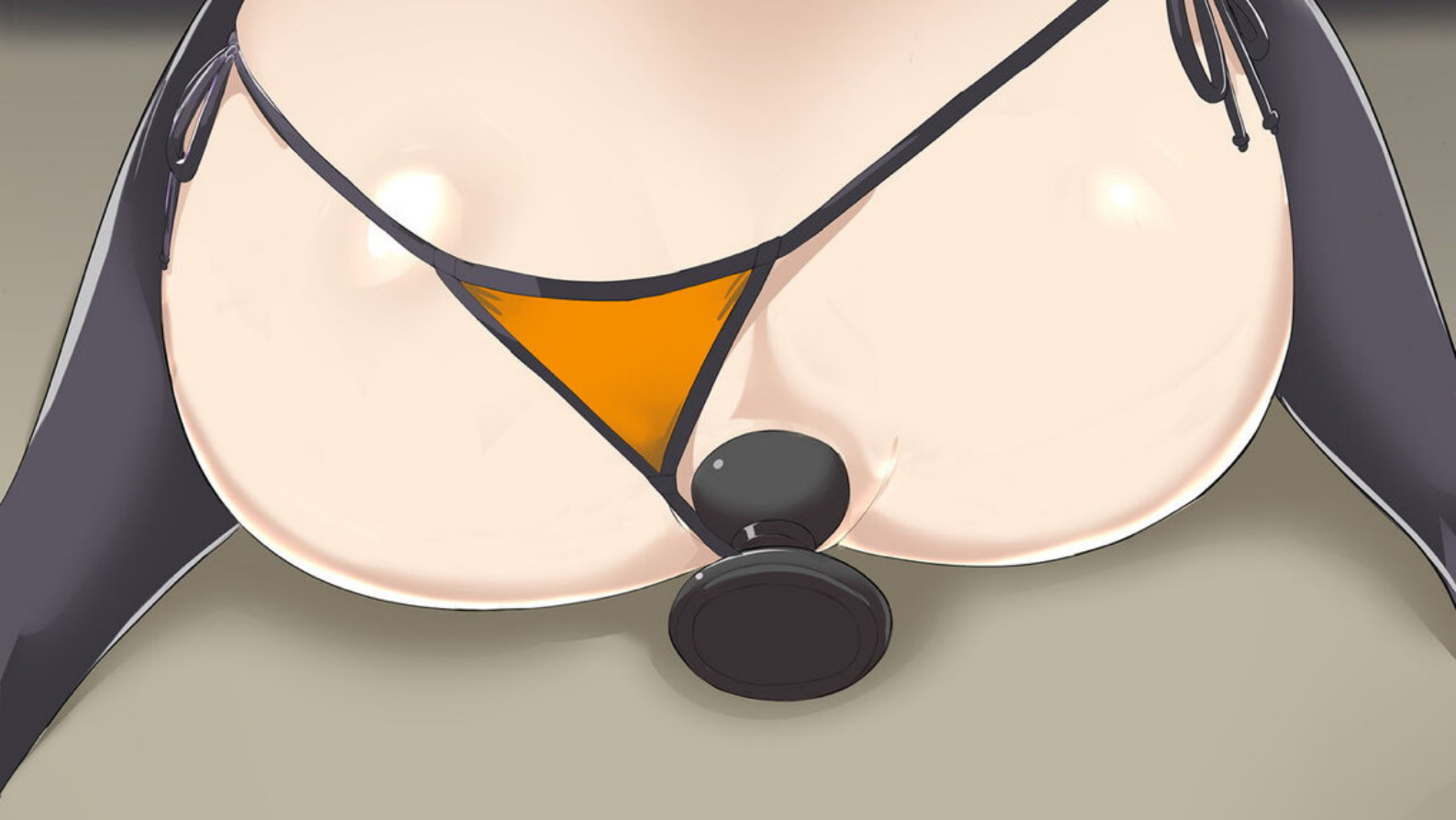
スイレンママ

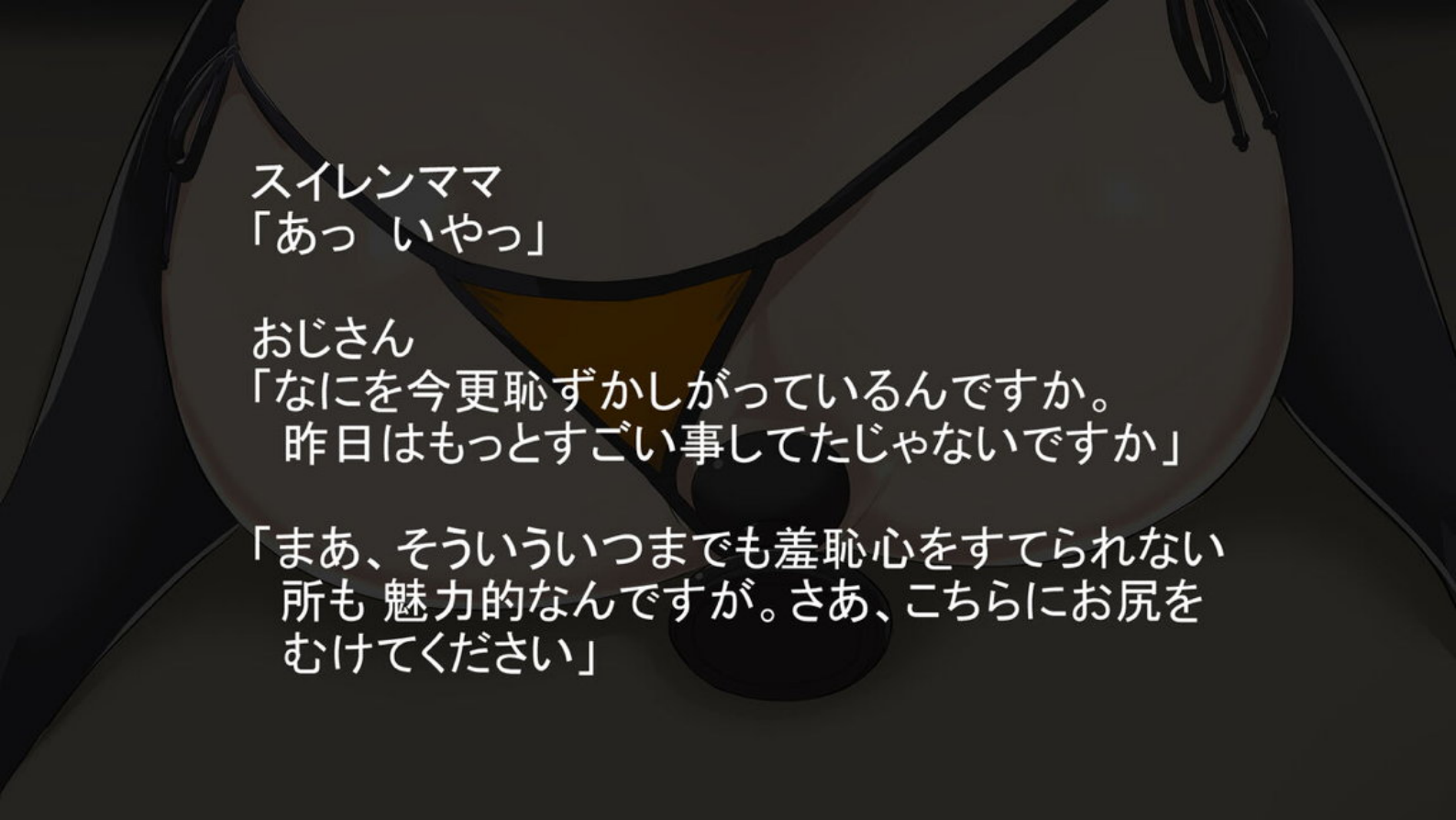
「え？ なぜですか？ 今日はただの撮影だって…」

おじさん

「裸だって撮影しますよ。何言ってるんですか。
そもそもなんでもいう事を聞く約束じゃないですか」

「それとも自分で脱ぐのは恥ずかしいですか？
それなら私がぬがしてあげましょうか？」





スイレンママ
「あっ いやっ」

おじさん
「なにを今更恥ずかしがっているんですか。
昨日はもっとすごい事してたじゃないですか」

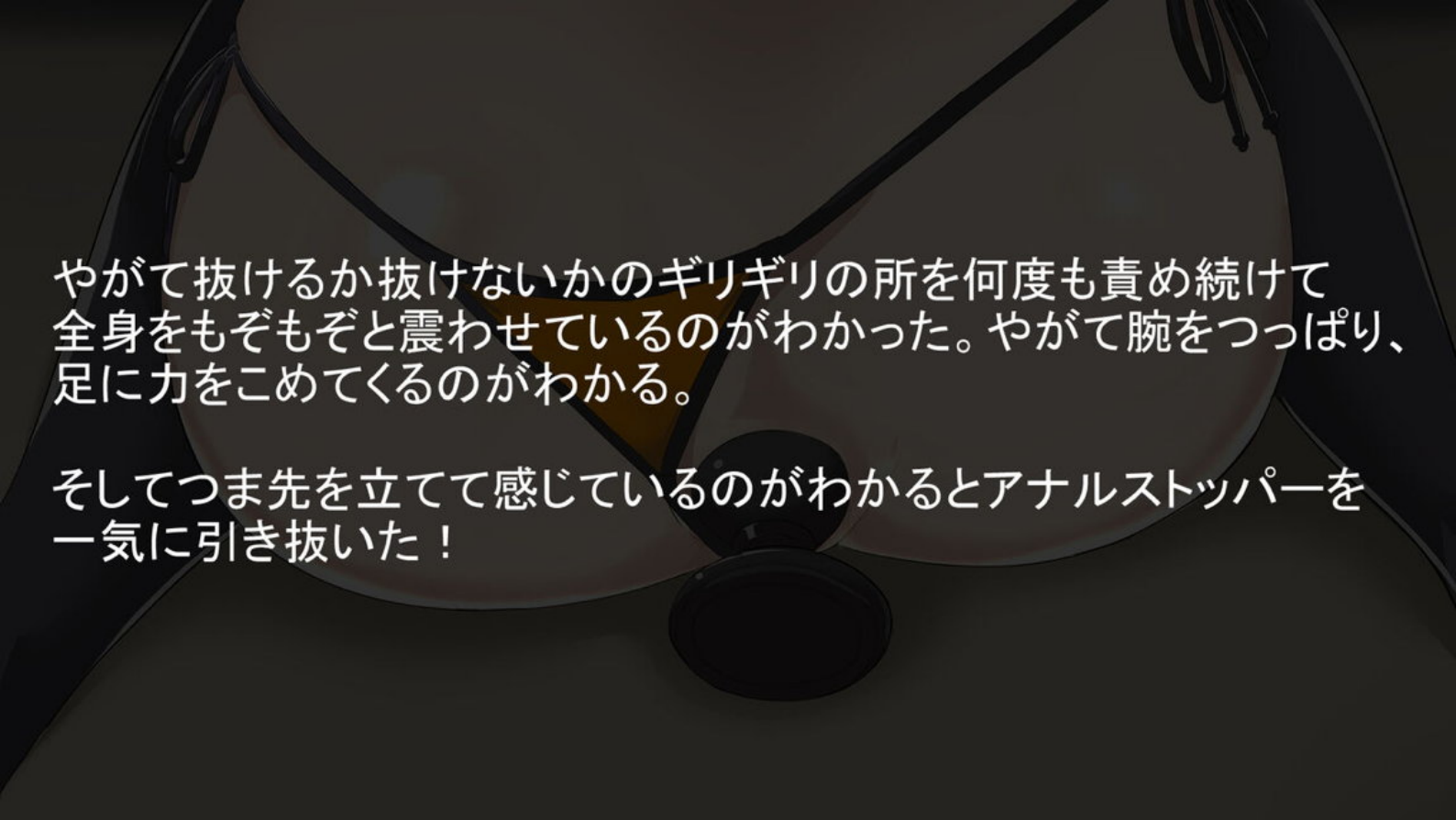
「まあ、そういういつまでも羞恥心をすてられない
所も 魅力的なんですが。さあ、こちらにお尻を
むけてください」

おじさん

「どれだけほぐれているか調べましょう。…んんっ、
まだ硬いな。もう少しほぐさないとうまく入らないかもしれませんね。もっところ…ころっ」

ぐりぐりとアナルストッパーをかき回すおじさん。さらに押し込んだり抜こうとしたりゆっくりと何度もあなるの淵を刺激するようにピストンさせた。

スイレンママが感じているのがわかるとつりびとや、やまおとこに胸やおまんこを刺激するようにうながした。



やがて抜けるか抜けないかのギリギリの所を何度も責め続けて全身をもぞもぞと震わせているのがわかった。やがて腕をつっぱり、足に力をこめてくるのがわかる。

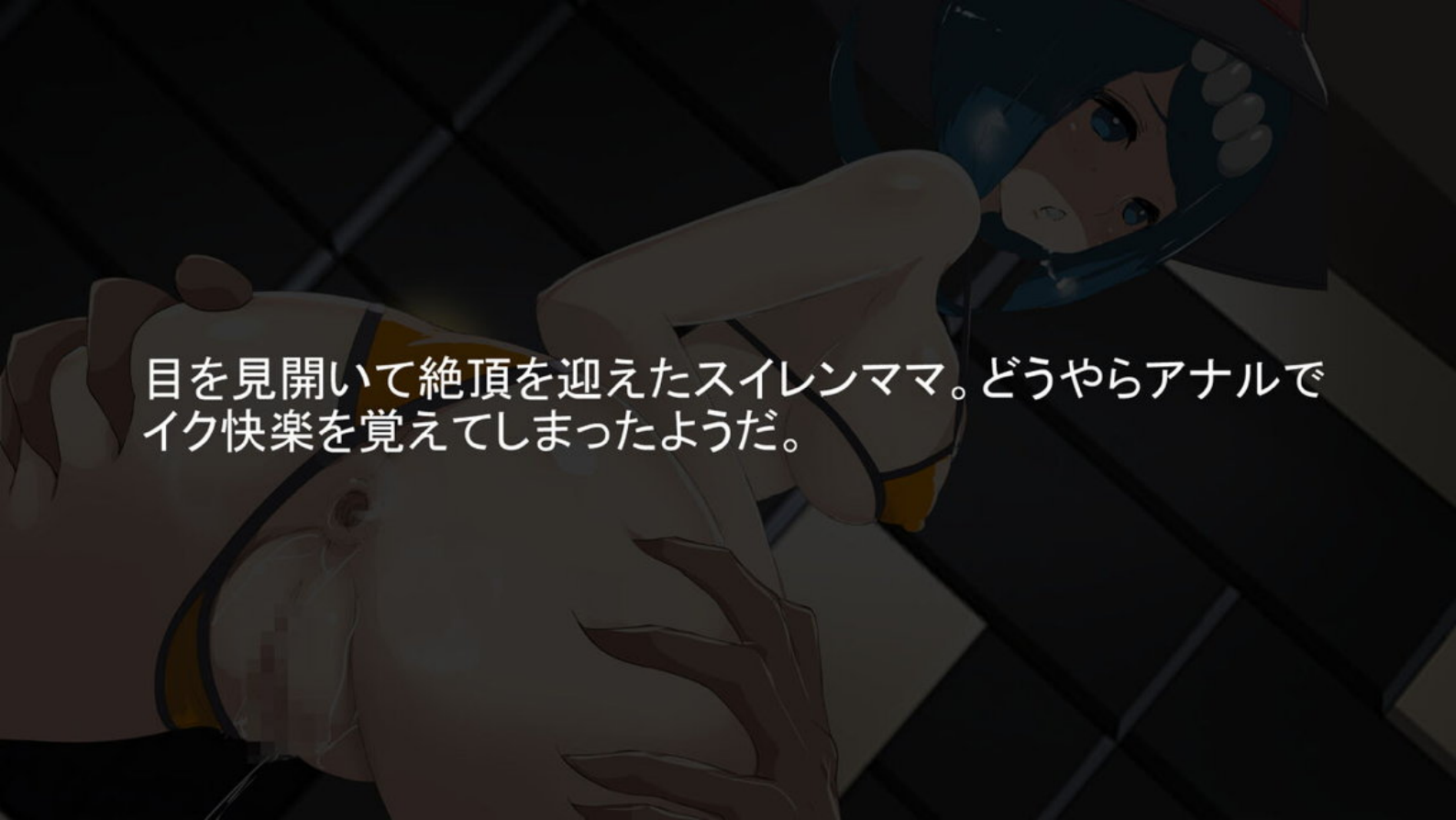
そしてつま先を立てて感じているのがわかるとアナルストッパーを一気に引き抜いた！



スイレンママ
「あががっ あうっ」

プシャー!!! イクと同時に潮をふいてしまった。





目を見開いて絶頂を迎えたスイレンママ。どうやらアナルでイク快楽を覚えてしまったようだ。



おじさん

「いやあ。見事でしたね奥さん。初めてのアナルプレイで絶頂を迎えるなんてよほどアナルが好きなんですね」

「ご自分じゃ見れないかもしれませんが、ひくひくと口をすぼめながらぽっかりと小さな口をあけて物欲しそうにしていますよ」

スイレンママ

「そんな…事…」



おじさん

「いやいや、みなさんどうですか？ 見てあげてくださいよ」

やまおとこ

「すごいな。アナルが口を開けたままだ」

つりびと

「これ絶対チンポが欲しいって言ってるね！ こんなね、ドスケベ
アナルにはおじさんの極太チンポをあげないとね可哀想ですよ！」





おじさん

「そうですか？ それなら…うっ！

なかなか入っていきませんね。おまんこと違ってアナルは
愛液を出すわけじゃないですからね」

スイレンママ

「あぐっ あっぎぎぎっ…」



おじさん

「もっとローションを塗ってあげましょう。んんんっ…もっと
こうかな？ アナルと膣は角度が違うんでしょうか」

「ちょっと入れにくいですね。でも…うっ！」



おじさん

「おおおお…、やっと根元まで入った。
アナルストッパーで拡張した甲斐がありましたよ。
…しかし…うっ、流石は奥さんのアナルだ。
いい具合だ〜」

スイレンママ

「くはっ、うぐう…痛いっ。動かないで…」



おじさん

「最初はなれないので痛みがあるかもしれませんが、大丈夫ですよ」

「そのためにアナル拡張をしたんじゃないですか。ゆっくり動き続けますからリラックスしてください。それともおまんこが寂しくて物足りないですか？」





カメラマン

「おじさん、アナルのぽっかりあいた所、カメラに収めたんすけど、おまんこの中も撮影したいんですね～」

つりびと

「それならね、セロテープで固定して広げるのはどうですか？
そういうのAVで観た事ありますよ。私はセロテープ持ってます」

おじさん

「いいですね。やってみましょうか。
じゃあそっち側お願いできますか？私はこっちを。
中が良く見えるように出来るだけ広げましょう」

つりびと

「膣内ってこんな感じなんですね。すごい、液があふれてきてセロテープが止めにくいですね」

「もう、奥さんアナルにチンポ加えこんでおまんこ見られて感じてるんじゃないですか？ もっと広げてあげましょうかね」

やまおとこ

「おまんこが中まで丸見えでヨダレまでたらしてるんですか？ そそりますね。私のチンポも挿入してもいいんでしょうか？」

カメラマン

「どうぞどうぞ、是非2本差しいきましょう～！」





スイレンママ
「や、やめて…これ以上…」

おじさん
「大丈夫ですよ。アナルでイケたんですからきっと
気持ちいいですよ。さあ、やまおとこさん。一思いに
挿入してあげてください」

やまおとこ
「ではいざ参る！ …ふん！」

スイレンママ

「あっ！ …ぐううっ あああああん♥」

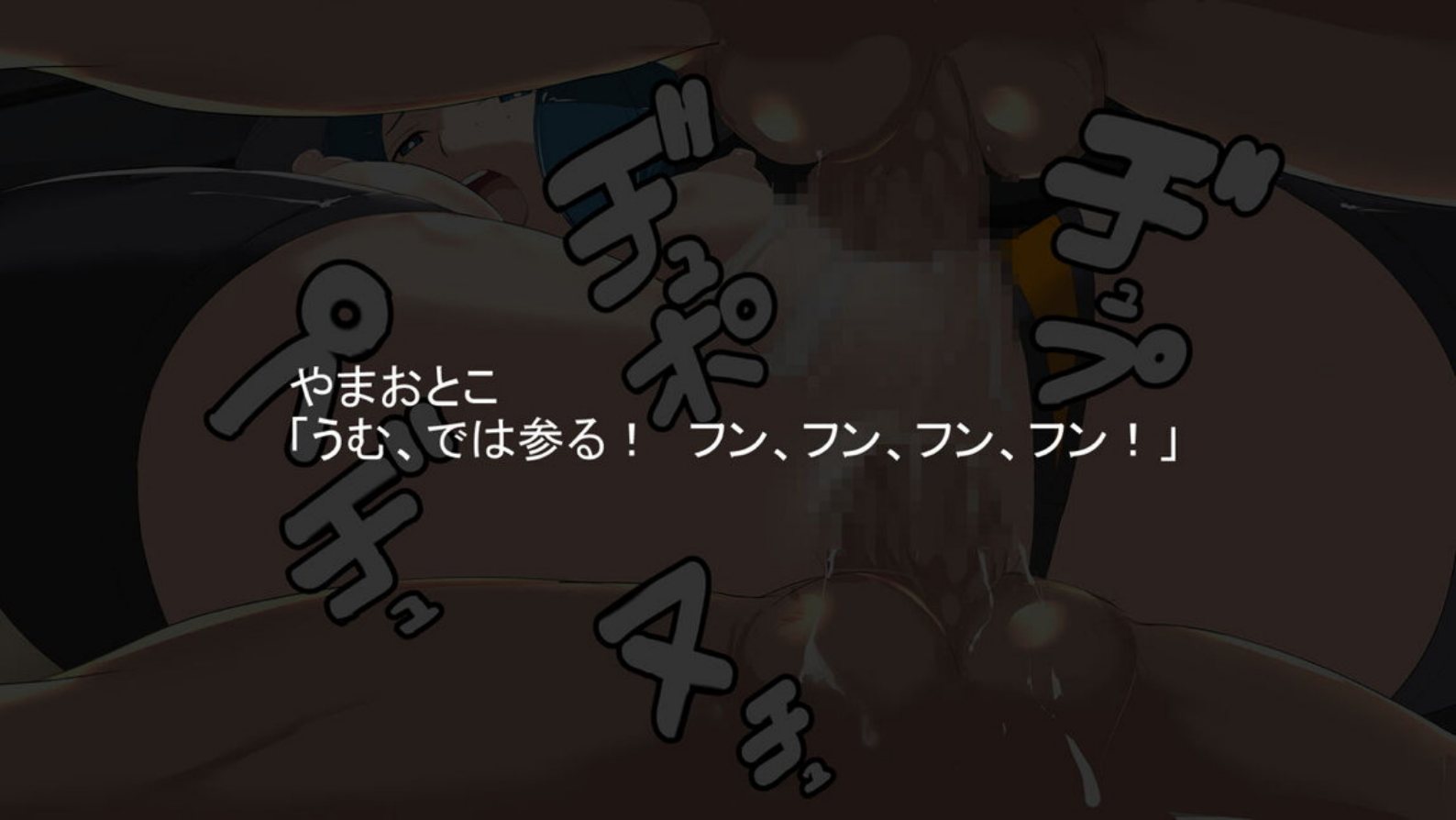
やまおとこ

「はああああ、奥さんの中って…こんな感じなのか。
じっとり暖かくて絶妙な締め付け。これは…たまらん！」

おじさん

「おまんこに挿入されたとたんきゅうううっとなりましたよ」

「はあああこれはたまりませんね。とにかくゆっくりと動き
続けるのでやまおとこさんもタイミングを合わせえてください」



やまおとこ

「うむ、では参る！ フン、フン、フン、フン！」



おじさん

「いいですね。おまんこがパンパン突かれるたびにキュンキュン
こちらも締め付けられて最高ですよ」

「どうですか？ 奥さんもそろそろ気持ちよくなってきたるん
じゃないですか？ 硬い極太のうんこが無限に出入り不思議な
快楽があるでしょう？ しかもおまんこが同時に挿入されて
内蔵のなかまで犯されているような感じですか？」

スイレンママ

「ああ…はふっ、むんんんっ くはっ、ふぐぐぐっ



おおじさん

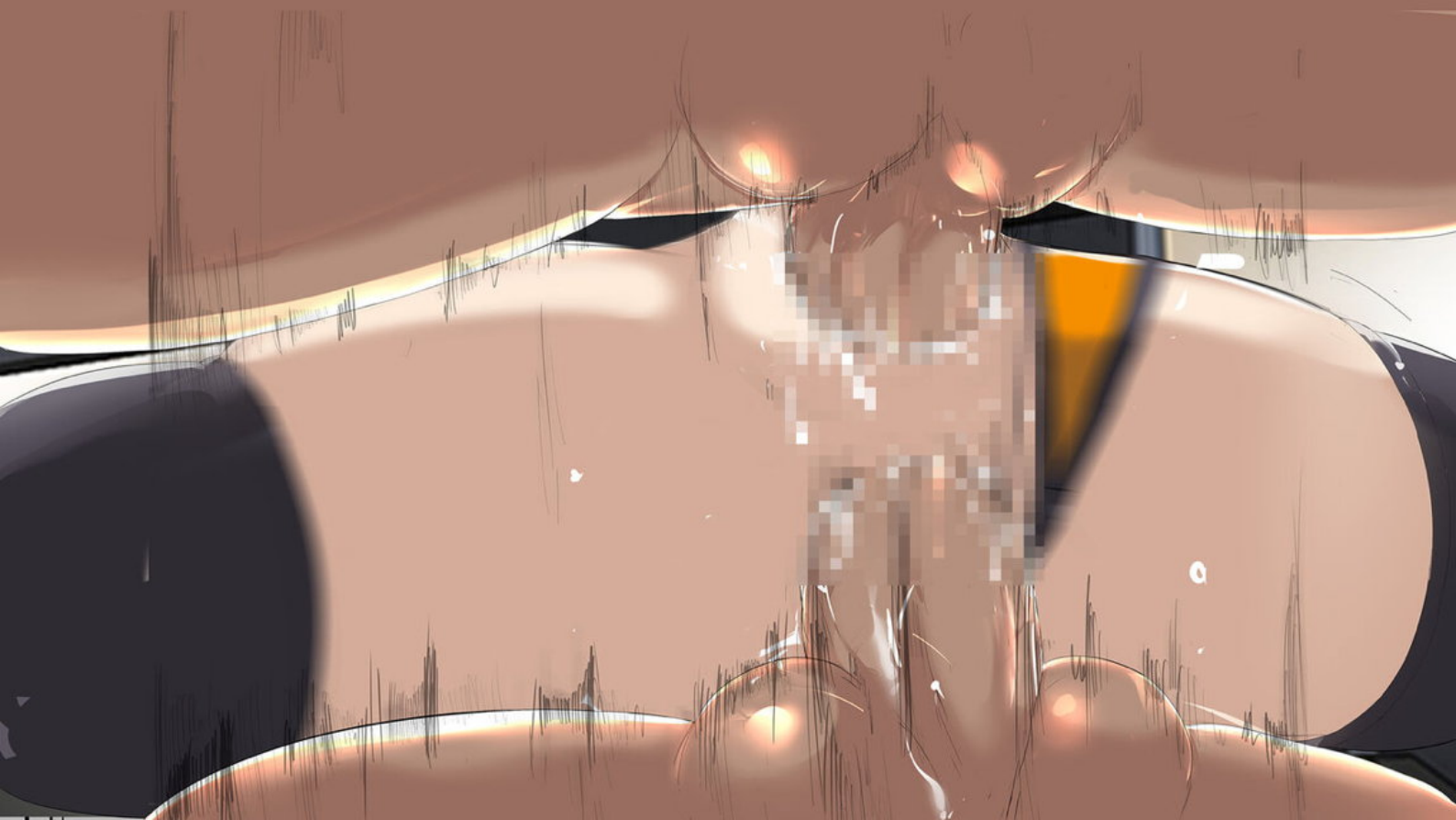
「味わった事がない快樂でどうにかなりそうですか？ アナルでイク快樂はまたおまんこ違って特別でしょう」

「やまおとこさん、
その調子でどんどん責めてあげてください」

やまおとこ

「こっちも…すごいな。まんこがチンポをびくんびくんと飲み込もうとしている！ こんな食いしん坊なまんこ、ワシは初めてだ！」

「最高だ!! こんな…フン! ドスケベマンコには1週間貯めこんだ濃厚なスペルマをご馳走してやりたい！」



スイレンママ

「はあああっ、ふぐぐうん♥」

ああん♥ 駄目え」

おじさん

「くうっ、こっちのケツマンコも最高ですよ。さっきから根本の締め付けがどんどん激しくなってきた」

やまおとこ

「ああ、もう射精したい！ すぐにしたい！ したい！ 出したい！
フン、フン、フン、フン、フン、フン、フン、フン、フン、フン！」



おじさん

「僕も我慢できなくなってきました。もう射精することした考えられません。もう遠慮なくイキましょう、やまおことさん！
奥さんだって気持ちいいはずですよ」

スイレンママ

「あああああっ、いやああああああ
もっとゆっくりいいいい、ゆっくり動いてえ〜」

やまおとこ

「無理、無理、無理だ〜！ フン、フン、フン、フン！
うううう、もう出る、出る、出る！」

おじさん

「ああああ、僕も出ます！ もう出ます！
おおおおおお！ もう出る！ 出る！」

やまおとこ

「ああああ。もう滅茶苦茶にしたい！
出したい！ 出る！ 出る！」

おじさん

「あっ イク！ イク！ ああ、もう出る！ イっちゃいます！
全部出したい、おおおおっ！ 出すぞ——！」



スイレンママ

「壊れちゃう。壊れちゃう、あがああああっ！」

もうゆるじでえごわれ…ちゃうううううう…」

おじさん

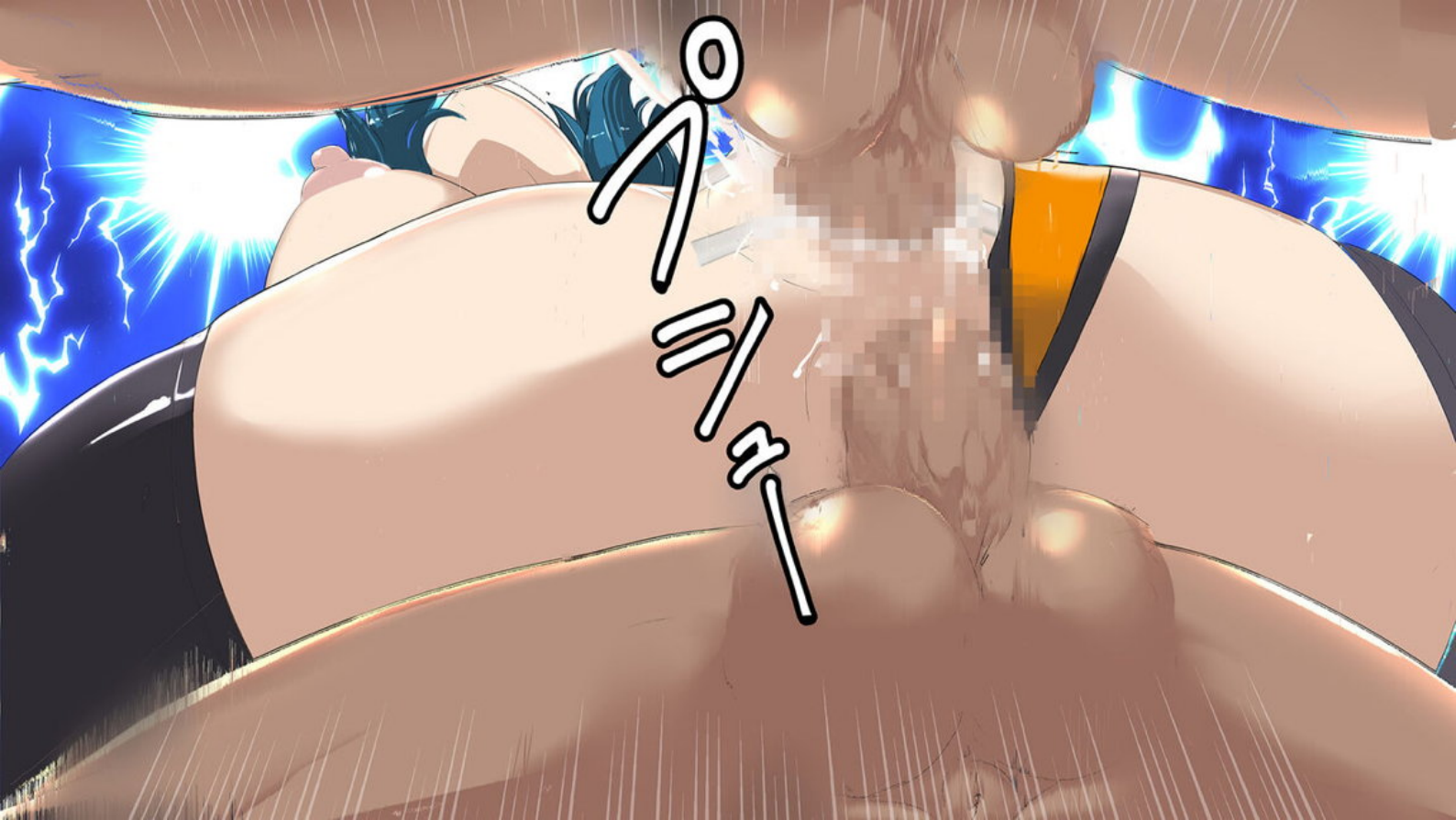
「あっ、もうっ…あっ、ああああ！！」

やまおとこ

「おおおおお！ もう…出るっ！」

おじさん

「出すぞ！ 出す……もうっ…あうっ イクッ！！」



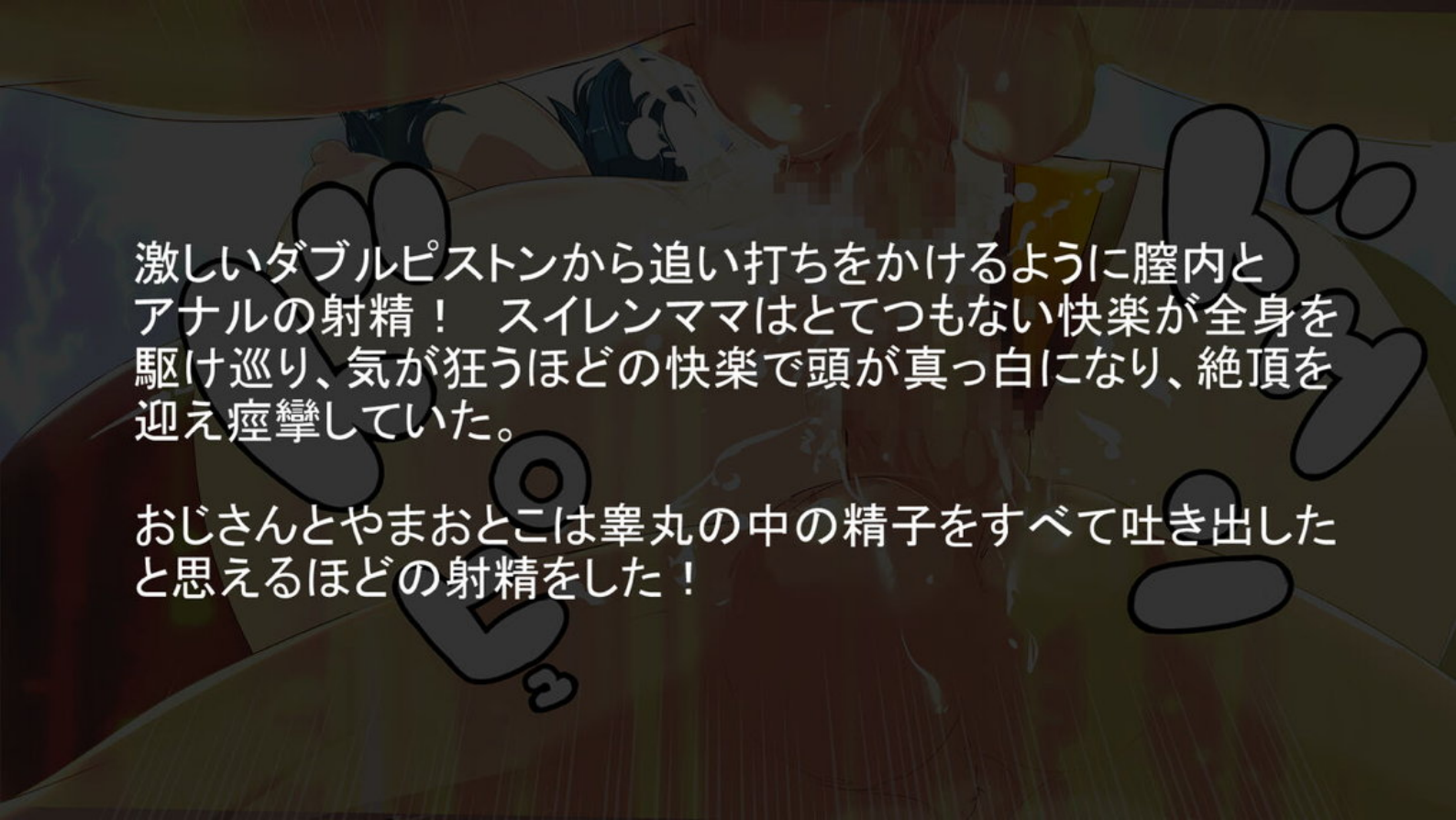


スイレンママ
「駄目…イクッ！！！！」

プシュー！！！！！！

盛大に潮を吹き絶頂を迎えるスイレンママ。





激しいダブルピストンから追い打ちをかけるように膣内と
アナルの射精！ スイレンママはとてつもない快樂が全身を
駆け巡り、気が狂うほどの快樂で頭が真っ白になり、絶頂を
迎え痙攣していた。

おじさんとやまおとこは睾丸の中の精子をすべて吐き出した
と思えるほどの射精をした！



あまりの疲労と快楽で気を失うスイレンママ。ゆっくりとペニスを引き抜きベッドに寝かせるおじさんとうやまおとこ。

下腹部をクイツと押すとセロテープで押し広げられたおまんことアナルから大量の精子がドロッ、ドロッとあふれ出てきた。

おじさんとやまおとこは快楽と心地よい疲労からとなりのベッドに横たわった。

おじさん

「はあ、はあ、はあ…はは、なんて気持ちちんだ…。脳みそが鼻と耳からこぼれ落ちそうなくらい気持ちよかった。腰がしびれ…なんて清々しい疲労だろう」



おじさん

「奥さんもこんな経験したらもう普通のセックスじゃ満足できなくなるんじゃないですか？ …はは」

カメラマン

「どうぞどうぞ、やっちゃって～。
次は僕も参加させてもらいますよ～。
つりびとさんはどっちを使いますか？」



つりびと

「僕ですか？ それはね、やはりお尻好きなのでね、
はアナルをね」

カメラマン

「じゃあ僕はおまんこいただきます～す！
おじさん、カメラお願いしまっす！」





おじさん

「はあ、はあ。ちよつ…息を整えてから。
はあ～…いいですよ。代わります」

こいうしてぐったりしたスイレンママをつりびととカメラマンは無理やり犯し続けた。

つりびと

「しかしね、ゴム無しでこんなに中出ししまくってね、
大丈夫ですか？」

カメラマン

「さあ、僕は知りませ〜ん。でもAVじゃよくあるじゃないですか。
平気っしょ？」

つりびと

「たしかにね」

その後も再び入れ替わり立ち代わり日が暮れるまでスイレンママの身体を堪能し犯し続けた。

その後解放されたスイレンママは約束通りデータをうけとり宿まで送り届けられた。もちろん録画したマスターデータは皆のハードディスクに入っていた。

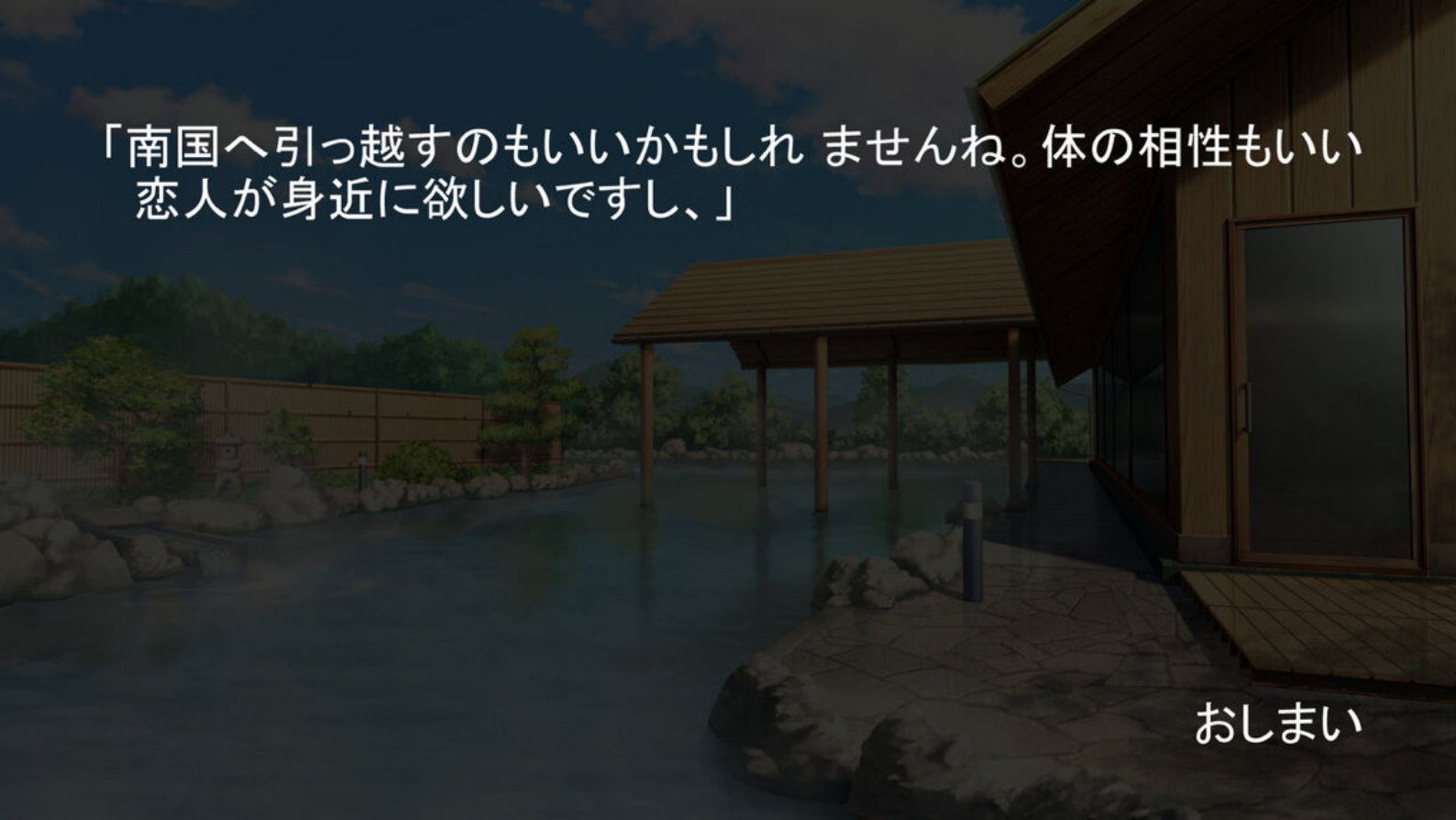
某サイトに投稿されたスイレンママの動画。
AVではない一般女性とのプライベートのプレイ動画。
女性のスタイルの良さとシチュエーションが話題をよび、

彼女は誰なのか？ 続きはあるのか？

こんなプレイをできる素人がいるわけがないなど多くの人が
コメントを残した。温泉につかりながらくつろぐおじさん。

おじさん

「はあああ、なんて素敵な2日間だったんでしょ。もうただの
盗撮では満足出来なくなっていましたよ」



「南国へ引っ越すのもいいかもしれませんが。体の相性もいい
恋人が身近に欲しいですし、」

おしまい